

2011年度 修士論文

神聖視される王の身体

～走行儀礼によって示される古代エジプトの王と王権～

The Sacred Body of Kings

— Kings and The Legitimacy of Their Power represented in
Running Festival in Ancient Egypt —

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツ文化領域

5009A001-5

青木 美子

Aoki, Yoshiko

研究指導教員： 石井 昌幸 准教授

神聖視される王の身体
～走行儀礼によって示される古代エジプトの王と王権～

序章	1
第1章 古代エジプトにおける、王権観の成立と衰退	
1-1 初期王朝時代・古王国時代	7
1-2 第1中間期・中王国時代	12
1-3 第2中間期・新王国時代	14
1-4 第3中間期・末期王朝時代	18
第2章 古代エジプトにおける身体と死	
2-1 古代エジプトの身体観	23
2-2 古代エジプトの死生観（葬祭信仰）	27
2-3 死と身体	31
第3章 器としての王の身体	
3-1 国土としての王の身体	34
3-2 神の力の受け皿としての身体	39
第4章 走行儀礼による王の神格化	
4-1 走行儀礼と古代エジプトの王権の更新	43
4-2 儀礼的な王の死と、神との同化	45
結章	48
参考文献一覧	49

序章

問いの所在

古代エジプトで走行儀礼として行われていた王位の更新儀礼は、「王＝神の化身」もしくは「王＝超自然的な力を持つ超越者」としての王の働きを見定めるものである。それは、統治する王個人の肉体的・魔術的力を蘇らせる祭祀であり¹、支配者としての器を再構築するエジプトの王権観の中でも非常に重要な祭祀であった。本来、神聖王権を頂くエジプトにおいて、神々と直接交流出来る唯一の人間だった王の役目は、エジプト社会の中心人物であることを前提に、秩序の維持と国家の存続²であり、古来より戦士の長、祭祀の長として忠誠を誓った臣民の生活と生命の保障を行う事を義務付けられていた。

王朝時代の古代エジプトでは、王の中に宿る超越的な力をパフォーマンスする為に、運動行為もしくはスポーツ的な行為と呼ぶべき身体運動によって、積極的に行った記録が残されている。パフォーマンスの為に運動行為は、時に王自身のただの遊戯であったり、宗教的儀礼であったり、戦時下での戦士としての働きでもあった。

また、王の超越的な力をパフォーマンスする為に運動行為を行うのは、エジプトだけでなく他の文明にも多くみられることである。例えば、ヴァーージャペーヤと呼ばれる、古代インド王権下での戦車競技がそれに相当し、この競技は、王を勝者とする戦車競技であり、「即位式(rajyasuya)、馬礼祭(asvamedha)、ヴァーージャペーヤ(vajapeya)といった王に特別な力を授け、王を無敵とする大規模な祭式が発達した。多数のバラモンが執り行うこうした祭式において、王は維持的にインドラ神、ヴァルナ神、プラジャーパティ神等に擬せられている。王はこうした祭式によって地位を正統化され、特別な能力を具えた人間として行動した」³とされる宗教的儀礼であり、身体運動によって王権の確認と王権の更新が可能な祭祀である。

運動行為を伴わない王権の更新のみを例としてあげるならば、メソポタミア地域では新年祭が挙げられる。新年祭は毎年王位の更新を行う際、王は王権の象徴を一度剥奪され、王の資格を試された後、再び王権を譲渡される儀礼を行う。日本では毎年11月の下旬に収穫祭を伴う新嘗祭が天皇によって行われる。

しかし、この2つの祭礼は王位の更新という点では王権の確認、もしくは再譲渡がなされるが、身体運動をとまなうのかと問えば身体運動が組み込まれた祭礼ではない。

古代エジプトにおいて、ヴァージャベーヤに相当する儀礼は上記でも述べた、走行儀礼であるが、走行儀礼の研究はすでに多くなされており、祭祀の機能に関しては、既に王の活力の蘇りを行う祭祀であり、支配権の獲得、再確認も同時に伴うという見解がすでになされており、それ以上の意味を見つけ出す事は非常に難しいとされている。

しかしながら、走行儀礼を行う事によって示される祭祀の機能の根底にある、「王の身体＝神、神の力の受け皿、国、国土」という図式が走行儀礼によって強調され示された事に関しては、触れられておらず明らかになっていないと言える。そこで、本研究では古代エジプトの王権と走行儀礼についての先行研究に触れ、走行儀礼という条件下で古代エジプト王の神聖性と「王＝神、国土」がどの様に示されるのかを明らかにし、王権が強調されたのかを考察するものとする。

研究方法

本研究を進めていく中で、現存する神殿・石碑・墓などに残された壁画などの図像史料と、それ等に伴った文字史料である考古学的な資料、それ等の史料に基づいて書かれた文献資料を中心的な手がかりとする。また、補助的な資料として、自身がエジプト国内や海外の博物館で撮影した写真を使用しながら、主とする先行研究に触れ、王と王の特殊性に関して考察した。神聖王権下の王の特殊性を考察する事によって、古代エジプトで行われていた更新儀礼によって、本研究の目的である王の神聖性と「王＝神、国土」という図式の明確化と、走行儀礼によって王権が強調される本質的な部分に近づけるのではないかと考えられるからである。

また対象とする研究が、図像・文字史料を使用するため、考古学的方法論を使用することは勿論、走行儀礼という条件下で古代エジプト王の神聖性と「王＝神、国土」がどの様に示されるのかを明らかにし、王権が強調されたのかを考察するため、文化人類学的方法論も使用し本研究を進めていくものとする。

主な先行研究からみた本研究の位置づけ

古代エジプトの王権観及びスポーツを取り扱った学術的な研究は世界各国で多数存在する。

古代エジプトの王権観に関して論じられているものは、『The golden bough』⁴と、『Kingship and the god』⁵があげられる。『The golden bough』では、古代エジプトにおける王権観は、古代の王朝社会の中で神聖王権の形が最も完成され、王が国や共同体に与える影響について述べている。また、『The golden bough』を書いた J. G Frazer の論に影響を受けた Frankfort の『Kingship and the god』では、『The golden bough』に上げられた神聖王権に従い、古代エジプトの王権観をまとめ上げ、古代エジプトの王の役割、王とはどのような存在であったのかを述べている。

王の行うスポーツもしくは身体運動に関わる研究及び著書は『古代エジプトの遊びとスポーツ』⁶や、『古代エジプト新王国時代におけるスポーツと王権について』⁷によって、王家の行うスポーツを歴史的観念と理想的な国王像、エジプト国家における王の役割、王の行うスポーツの王権的技能について、王の出す身体運動の記録は超人的なものであり、その記録によって王の理想像の維持が可能であるとし、走行儀礼を行う祭殿の建築形式の歴史的変化と復元についてと、儀式の二元性について、『古代エジプトにおける「セド祭」の建築形式について』⁸の中で詳細に述べられている。

しかし、上記に取り上げた先行研究や、それ以外の先行研究には、「王権とスポーツ」、「王の超越性と王権」、「儀式の二元性」等が非常に多く取り上げられていたが、儀式の際に王が所持する持ち物⁹や、儀式を行う広場を囲う様に置かれた地域神の祠堂について触れているものが見られなかった。

そこで、古代エジプトの王権と王位更新儀式を論じるにあって、3つのキーワードを定め、仮説を立てる。

- 1、 走行儀礼をおこなう祭殿の建築様式
→ 王が走行行為を行う際、その広場を囲う様に地域神の祠堂が設置されている
- 2、 走行儀礼を行う際、王が手にする杖

→ この杖はエジプト王の王権を象徴する持ち物の1つであり、これを手に持ち歩くことによって、何を示すのか

3、 古代エジプトで古くから信仰されている死生観(来世観)に基づいたオシリス神との同化

以上3点のキーワードを元に、古代エジプトの王朝下で、王の神聖な身体と王権の関係について、走行儀礼が果たした機能における王権の強調について重点を置き、考察を行うことを本研究の目的とする。

本研究の構成

古代エジプトにおける王権の概念とファラオの神聖性とは、当時のエジプトの社会と宗教の主軸であり、エジプト史の早い段階から、行政の基本的性格や、王とホルス神との強い関係性が確立されていた。古代エジプトの王権がいかにより多くのイデオロギーに取り巻かれていたかは、王と神の関係、王による国の支配が王権にどのように関係するのかを示している。古代エジプトでは早い段階から、王の在り方や、王と太陽神を筆頭に多くの神々との繋がりが確立されていた。王は自身の王位の正統性を示す為、浮き彫りや碑文の作成、先王の葬祭殿や墓の完成保証等に務め、王権の継続性を証明してきた。また、王は国土の支配権を強調し、国を統治する為に5つの称号(5重称号)を持つようになった。王は「ホルス名」、「ネブティ(2女神)名」、「ネスウ・ビト(上下エジプト王)名」「サア・ラー(ラーの息子)名」、「黄金のホルス名」の5つを使用していた。これらの王の称号の使い方によって、王朝時代の王権の発展と衰退などの変化を辿る事が出来る。

そこで第1章では初期王朝時代から末期王朝時代(紀元前747年頃～332年頃)までの全30王朝の中に見る事が出来る王権観の成立・変化・衰退を①初期王朝時代・古王国時代②第1中間期・中王国時代③第2中間期・新王国時代④第3中間期・末期王朝時代の4つに区分し、歴史的流れと王権の象徴である「王の5つの名(称号)」、国内・国外対策等の例を取り上げ、筋立てていくものとする。

第2章では、古代エジプト人が身体と死をどの様に考えていたのかを論じる。

本研究では、走行儀礼によって生じる王の身体の神聖性と王権を論じるものとしているが、古代エジプト王の神聖性や王権観は、エジプト古来の身体観や死生観と密接に関わっていると推測できる。そのため本章では、古代エジプトの王の特殊性と、王権の理解を深めるために、現存する葬祭文章からの情報を手掛かりとし、古代エジプト人の死と身体の関係性を明らかにする。第1項は古代エジプトの身体観、第2項では死生観を、第3項では死と身体に対する信仰を論じ、第3章の足掛かりとする。

第3章では、エジプト及び、古代王権における王の身体の在り方に触れる。「王=国土」、「王=神を宿す器」という図式の成立を、日本の新嘗祭や大嘗祭を例とし、媒体によって肉体に宿る神の力と、儀礼を行う「舞台装置」から導き出される葬祭信仰の「冥界めぐり」等の本研究独自の視点によって、王の身体を神聖視する意義と、王の身体の本質的な役割をのべ、第4章に繋げる。

第4章では、1章から3章までに論じてきた王権の成立と死と身体、王の身体を通じて、古代エジプトの王権の本質と神格化される王の性質と、王位更新の儀礼が果たした機能が、「王殺し」と走行行為及び、王の儀礼的な死と埋葬によって引き起こされるオシリス神との同化によって生じる、王権の再譲渡の過程を明らかにすると共に、「儀礼的」という言葉に着目し、走行儀礼による王の神格化を示す。

〈注一覧 一序章〉

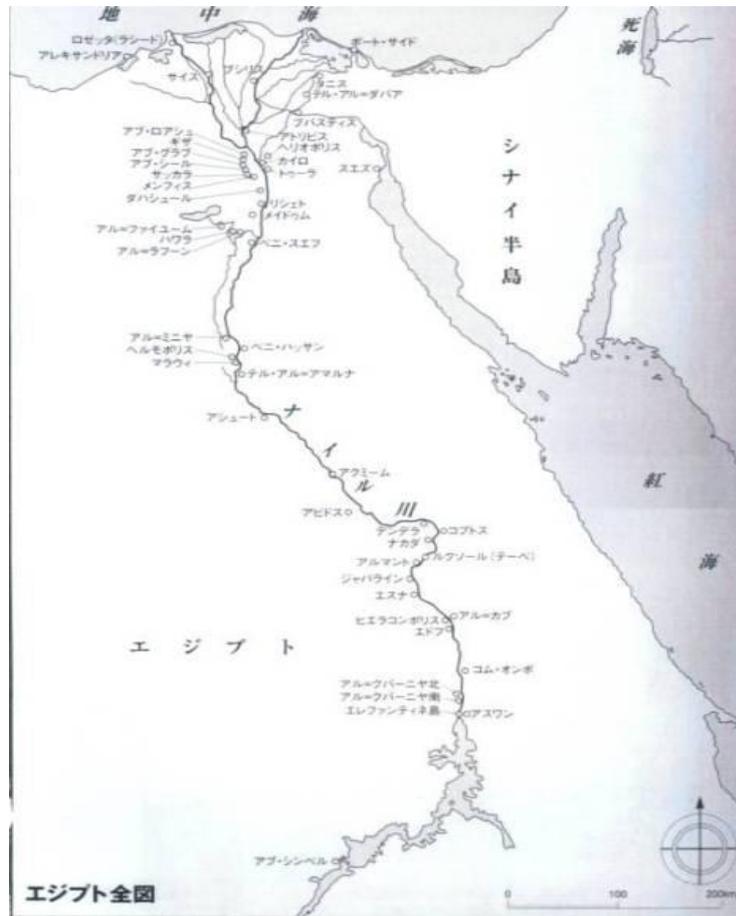
-
- 1 ヴォルフガング・デッカー、津山拓也(他訳)、『古代エジプトの遊びとスポーツ』財団法人法政大学出版部、1995年、32頁
 - 2 『同上書』、32頁
 - 3 山崎元一、『古代インドの王権と宗教 一王とバラモン一』、刀水書房、1994年、35頁
 - 4 Frazer, J.G., *The Golden Bough*, Part III, Tokyo, 1913.
 - 5 H. Frankfort, *Kingship and the gods, A study of A ncient Near Eastern Religion as Integration os Society and Nature*, The University Cicago Press, Cicago 1948.
 - 6 ヴォルフガング・デッカー、津山拓也(他訳)、『前掲書』、1995年
 - 7 瀬戸邦弘、「古代エジプト新王国時代におけるスポーツと王権について」、寒川恒夫編、『スポーツ人類学研究会』、日本スポーツ人類学学会、平成13、29～53頁
 - 8 関和明、「古代エジプトにおける「セド祭殿」の建築形式について」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第447号、1993年、119～128頁
 - 9 ただ単に、王権を主張させるために持って儀式を行ったなどの表記はある。

第1章 古代エジプトにおける、王権観の成立と衰退

1-1 初期王朝時代・古王国時代

初期王朝時代(紀元前3100年頃～2686年頃)は、古代エジプト全土を統治した最初の2つの王朝を含む時代の事を指す。この時代はエジプトの地理上、南から1筋で続いてきたナイル川が支流に分かれる、上下エジプトの中心地であるメンフィスに首都が置かれていた[図1]¹⁰。メンフィスはエジプトが統一される以前から、各地の物資や人、メソポタミア地域の交易品が通過する地域であり、初期の統一王朝下では、中央集権化した政府の所在地、国内最上の政治的重要地、そして国内に多数ある宗教センターの総本山としての性格が非常に大きかったとされている。

図1 エジプト地図



初期王朝時代は、第1・第2王朝の2つの王朝からなるが、第1王朝はアビュドス地域に埋葬された8人の王、第2王朝の王の人数は定かではないが、初めの頃はサッカラに、後の王達はアビュドスに埋葬されている。

初期王朝時代の王権観に繋がる、王の称号の特徴の最たる部分は、①ハヤブサの姿のホルス神が守護する、「セレク」と呼ばれる王名枠に描かれた「ホルス名」を既に所持していたことと、②上エジプトの守護神ネクベト¹¹と下エジプトの守護神ウラジェト¹²の標「ネブティ(2女神)名」、③上エジプトの土地を象徴する植物のスゲと、養蜂を行っていた下エジプトを象徴する蜂を標した、即位時に付ける「ネスウ・ビト(上下エジプト王)名」を採用したことである。

「セレク」に描かれるハヤブサの神ホルスは、古代エジプトで信仰されていた神々の中でも最も古く、多くの多様化し姿を変えた神の1つであり、太陽とも繋がりのある神であり、初期の王達はホルス神が止まった王名枠を使用していた。ホルス神は、神話上最初の王であるオシリス神の真の後継者(息子)であったが、王位を父オシリスから篡奪した叔父であるセト神と、王位継承の争いを起こしたとされている。王位継承争いは、最終的にオシリス神の息子であるホルス神が王位を継ぐことで決着がつく。ホルス神が玉座を得た事は、父から息子へと正統な王位の継承者に王権を譲る事を表現し、王が「ホルス名」を使用する事は、真の王であったオシリス神から王位を継いだ事を正統化し、全ての王達の玉座を守る事を意味していた。

また、第1王朝(紀元前3100年頃～2890年頃)のアネジュイブ王(紀元前2925年頃)は、それまで使用されていた「ホルス名」の他に、上エジプトの守護神ネクベトと下エジプトの守護神ウラジェトの標「ネブティ(2女神)名」と、上エジプトの土地を象徴する植物のスゲと、養蜂を行っていた下エジプトを象徴する蜂を標した「スゲとミツバチの名」と呼ばれて、即位時に付ける「ネスウ・ビト(上下エジプト王)名」、という称号を用いた初めての王である。

正式には、アネジュイブ王の先王であるデン王(紀元前2950年頃)が既に「ネスウ・ビト名」の称号を使用していたが「ネブティ名」と「ネスウ・ビト名」の称号を同時に使用した王はアネジュイブ王が初めとされている。

エジプト人は国を統治する際、国を構成する地域がお互いを補う事によって国が強まると信じていたため、統一後の王達は、「ネブティ(2女神)名」や、「ネ

スウ・ビト名」という上下エジプトを象徴する称号名を積極的に使用した。[図2]¹³「ネプティ名」を使用すれば、「2女神に守護された～(王名)」、「ネスウ・ビト名」を使用すれば、「上下エジプトを支配する～(王名)」と読む事が出来る。この様な二元性を表現する称号や言い回しは、古代エジプトには非常に多く、後の王達も王権を誇示する為に大々的に使用した。

初期王朝時代に続き、古王国時代(紀元前2686年頃～2613年頃)に入ると、王の称号や名前に変化が現れはじめる。古王国時代は、古代エジプト第3～第6王朝時代の事を指すが、古王国時代は初期王朝時代に確立された絶対権力を持つ王を軸とし、エジプトが初めて強力な中央集権国家として繁栄を迎える時期である。この時代は、王のピラミッド複合体や、貴族達のマスタバ墳が多く造営され、ピラミッド造営の最盛期を迎えるのと共に、文字記録の活発な使用、初期王朝時代に成立した太陰ナイル暦の本格的な使用、太陽神信仰が次第に強まる時代とされている。

古王国時代最初の王朝である第3王朝(紀元前2686年頃～2613年頃)は、第2王朝に続き王の人数はいまだ定かではない。

第3王朝期に見られる王権観の記録は、ネチェルケト(ジョセル)王(紀元前2667年頃～2648年頃)が造営したサッカラの階段ピラミッドや、葬祭儀式を行うための葬祭施設に残されている。第3王朝は、ピラミッドを考案しただけでなく、太陽神ラーを初めて崇めた王朝とされ、次の第4王朝による太陽神信仰に影響を与えた。

第4王朝(紀元前2613年頃～2494年頃)は、ギザにある3大ピラミッド(クフ王・カフラー王・メンカウラー王のピラミッド)と、それらを囲む廷臣の墓が建設された時代であり、ピラミッド造営と共に、第3王朝から始まった太陽神信仰が非常に強まった時期である。ピラミッド建設は農夫たちの仕事が無くなる農閑期に、国家事業として建設された建設物であり、巨大な建設物を作り上げる事が出来る点から、第4王朝は資源の使用を最大限ピラミッドに消費する事が出来る絶頂期であったとされている。次第にピラミッドを含む王墓複合体の建設は、ギザからアブ・シールへと移り規模も小さくなるが、一部の王達はピラミッドの隣に太陽神神殿を建設し、太陽神信仰が古代エジプトの葬祭儀礼に関連してくるようになる。

続く第5王朝(紀元前2494年頃～2345年頃)は、首都が置かれていたメンフィスの主神プタハ神を崇めるメンフィス神派が、太陽神ラーを主神とするヘリオポリス神派に脅かされる時代である。第4王朝期に国家事業として行われていたピラミッド建設の長期化等の影響で、国民に不満が広がり労働を拒否したと考えられている。その結果、首都メンフィスの主神プタハに対する信仰に影響を与え、第4王朝期から信仰が強まってきた太陽神派が一気に台頭し、王と王権を脅かすようになった。太陽神信仰の強まりと比例し、王のピラミッドからは王権の弱体化を見る事が出来る。第5王朝最後の王ウナス(紀元前2375年頃～2345年頃)のピラミッドには、最古の葬祭文章であるピラミッド・テキストが刻まれているが、ピラミッド・テキストには食物を永遠に食べる事が出来る呪文や、墓盗人から自身の墓を守る呪文などが含まれている。本来王の死後には、王に忠誠を誓った神官や家臣、王の一族が死者の供養を行うのが一般的であったが、第5王朝期にはすでに王の墓が盗掘されるなどの被害にあい、王の永遠性が失われていたのである。その為、王はピラミッド・テキストの中にある呪文によって自身の死後を守らなければならなくなった。また、第5王朝の王達は、王による中央集権力の弱体化の影響から、地方のからの税の徴収が確実に行えなくなり、王の記念祭記念物の規模の減少、質の低下が生じる事となった。

古王国時代最後の王朝である第6王朝(紀元前2345年頃～2181年頃)の最大の特徴は、官僚や地方役人の世襲制の影響で、官僚や地方役人の忠誠心が低下し、王のピラミッドの側に家臣達がマスタバ墳を造営する事無く、自由に墓を作り始めた事である。本来王のピラミッドの近くにマスタバ墳を作る事は、死後神と同化し永遠の生を得る王の恩寵を得る事が目的であったが、第6王朝期では、官僚や地方役人達はそれぞれが治めていた地域に家族墓を造る様になった。王達は、王権の確立のために州を治める州侯の娘達と婚姻を結び、国を統治する事に努めたが、地方への役人の派遣による財政の圧迫から、治水・灌漑事業に取り組む事が出来なくなり、王の権威が失墜した。その後多くの州侯が覇権を争い、100年程の乱世がエジプトに訪れる事となる。

王朝の統一から中央集権国家の弱体を辿った初期王朝時代と古王国時代であるが、古王国時代にも初期王朝時代に続き、新しい王の称号が採用されるよう

になる。

古王国時代の王権観を特徴付ける称号は、第4王朝最初の王、スネフェル王(紀元前2613年頃～2494年頃)が新たな王の称号を採用したことである。スネフェル王は「ネスウ・ビト名」をカルトウーシュ[図3¹⁴、図4¹⁵]によって囲う事を採用した。

図2 第1王朝王名一覧(「ホルス名」「スネウ・ビト」「ネプティ」の称号)

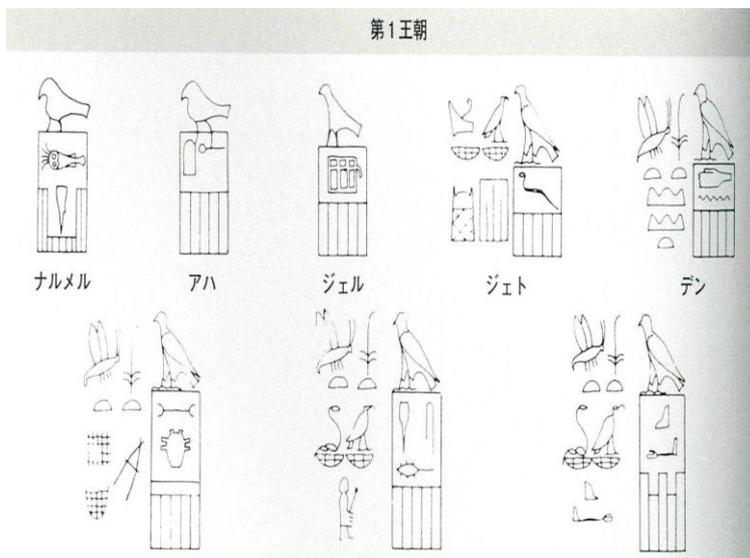


図2 シェン

図4 シェヌ

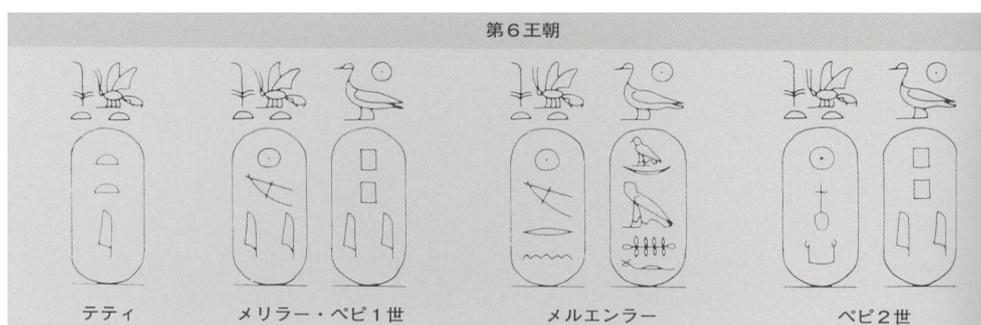


カルトウーシュは、シェンと呼ばれる縄で作られた円や輪を表現した古代エジプトの文字、ヒエログリフの文字記号の1つである。下の部分を重ね結んでいる型から、円と同意の“終わりが無い”、“無現性”の意味を持ち、王の名前を囲む事によって王の名と王自身を保護し、永遠性を保証するものとされてい

た。カルトウーシュで「ネスウ・ビト名」を囲う事によって、スネフェル王は、上下エジプトの守護女神の守護を受けた、“終わる事が無い永遠の王”という称号を作り上げたのだ。

他にも、「サア・ラー(太陽神の息子)名」と呼ばれる称号が付いた誕生名を、カルトウーシュによって囲んだ名を第4王朝期から王達は使用し、それまでのホルスの化身としての王だけではなく、太陽神の息子という神聖性を王は得る事となった。「サア・ラー名」の称号の使用は、王家と太陽神ラーへの信仰の関係性の強まりを益々密にし、王朝末期までの間「ネスウ・ビト名」と共に「サア・ラー名」は王の誕生名と即位名として必ず使用されようになる。[図5]¹⁶

図3 第6王朝王名一覧（「スネウ・ビト名」「サア・ラー名」のカルトウーシュ表記）



1-2 第1中間期・中王国時代

第1中間期は、古王国時代とその後の中王国時代(紀元前2055年頃～1650年頃)の間の時代を指し、政治的には国内が荒れ、統一が行われず、政治的に不安定な時代とされている。第1中間期の王朝は第7～第10王朝の4王朝を指し、短期間の王位継承による王権の弱体化を始まりとし、それぞれの州(セパト、もしくはノモス)を治める州知事(州侯)がそれぞれの覇権と王権を主張していた時期である。この時代は、初期王朝時代から首都と定められていたメンフィスに都を置く第7・8王朝と、ヘラクレオポリスに拠点を置く第9・10王朝、テーベに拠点を置いていた第11王朝(前期)の5つの王朝が乱立し、それぞれが王権を唱えていた。

第7・8王朝(紀元前2181年頃～2125年頃)では、古王国時代に引き続き、メンフィスに首都が置かれ第6王朝から引き続き国を支配していたが、

2つの王朝は約56年間という短い期間で王朝が終わったが、短期間による王朝の終焉は、第6王朝の終焉と共に、地方豪族や州侯による覇権争いが活発化し、国が混乱したことによって、王位継承権争いによる在位の短い王が続いた事が原因とされ、主要な建築事業も乏しく王家は存在してはいたが、王の権威は無いに等しいとされている。その事を証明するように第7王朝に関しては、第19王朝の建築物内に刻まれている歴代の王達の名が刻まれた王名表(アビュドスの王名表)に名前が刻まれていない。第8王朝に入り、王名表に王の名前が刻まれるようになり、王達の名前には王の称号が使用されてはいたが、国土の全てを支配していたとは考えられない。その理由として、第6王朝が確立された時には、ヘラクレオポリスを拠点とする第9・10王朝が王朝を並立して立てたからである。

第9・10王朝(紀元前2160年頃～2055年頃)は、約100年間続いたとされる。この時期の王朝は、ヘラクレオポリス出身の王によって王朝が開かれていたが、行政の中心地が何処に置かれていたのかについてははっきりしていない。第9・10王朝の支配地域は北部エジプトに限られていた。その理由として、第8王朝の滅亡後、第9・10王朝の最初の王ケティ1世が王権を主張し、王となったが第9・10王朝に少し遅れ、上エジプト(南部エジプト)のテーベを拠点とするテーベ侯を中心とする第11王朝が起こり、北部の第10王朝と南部の第11王朝での、覇権争いが開始されたためである。

第1中間期に起きた王権争いは、最終的にテーベを拠点とする、第11王朝3人目の王、メンチュテプ2世(紀元前2055年頃～2004年頃)の勝利によって混乱期は終了し、エジプトの国土は再び統一され中王国時代(紀元前2055年頃～1650年頃)へと時代は移り変わった。

中王国時代は第11王朝後期(メンチュテプ2世以降)から第12王朝(第13王朝も入れる場合がある)の2つの王朝からなり、約400年続いた時代である。第11王朝は比較的穏やかに国家体制を確立し、ヌビア・シナイ半島・リビア方面に遠征隊を派遣し、鉱物資源や交易品の確保を積極的に行った。第12王朝は第11王朝に続き、国外政策ではシリアやヌビアに遠征隊を派遣及び軍事遠征を行い、国内政策ではアジア方面に対する要塞建設や、徴兵制の制定等の軍事的動きと共に、建築物の建造も積極的に行われた。

第1中間期と中王国時代の王権観の特徴として、第1中間期では、「スネウ・ビト名」、「サア・ラー名」をカルトゥーシュで囲った称号(名)を使用していたが、各地の州侯の王権の宣言によって、王権はごく一部の地域のみ支配に留まっていた。また、古王国時代の王達の建造物から資材を流用し、使用していた事から、神として崇められていた王の偉大さは失われ、王の絶対的な権威は過去のものと考えられるようになっていた。

しかし、メンチュテプ2世による国土の統一によって、古王国時代には再び王の権威は復活した。その流れは、メンチュテプ2世の「ホルス名」の変化や、神殿を初めとする建築事業の盛んさ、交易に力を入れる事が出来た事からも見る事が出来る。メンチュテプ王の支配以降の王国では、第11・12王朝共に国内や国外対策も比較的成功したと言え、治世が長い王が多くいたことが、王権の復活の最大の理由ではないかと考えられる。それ以外にも、第12王朝後期には、王墓の周辺に地方役人のマスタバ墳が古王国時代の様に再び築かれるようになった事から、王と州侯との関係が再び強化されたと思われる。その後、一旦は州侯との関係性が強化されたが、第12王朝最後の王であるセベクネフェル女王(紀元前1799年頃～1795年頃)は、夫であったアメンエムハムト4世(紀元前1808年頃～1799年頃)の死後王位についたが、後継ぎなくその生涯を終えた。結果、第12王朝は終焉むかえる事となった。王朝が途絶えた事から、約250年続いた中王国時代は幕を閉じ、この後エジプトに移住してきた異民族のヒクソスと、短命の王が続いた次の王朝の影響から、エジプトは第2中間期(紀元前1650年頃～1650年頃)となる。

1-3 第2中間期・新王国時代

第1中間期と第2中間期初期の違いは、第1中間期に起きた激しい覇権争いと比べれば、比較的穏やかな時代であったとされている。しかし、第13王朝(紀元前1795年頃～1650年頃)期には在位期間が短い王が続いたためか、第12王朝程王墓複合体を建造できる程の力を持つ事は叶わなかった。中王国時代に制定された新しい官僚制度も、そうした短命の王が続いたため乱れ、紀元前1700年頃には下エジプトのデルタ地帯に第14王朝(紀元前1750年

頃～1650年頃)が立った。既に、第13王朝が14王朝よりも南部地域を支配していたことから、第14王朝はデルタ地帯の限られた地域のみ支配権しか持たなかった。

第2中間期の最大の特徴は、デルタ地帯の一部の限られた地域ではあるが、国土が初めてエジプト人以外の民族によって支配され、異民族のヒクソスによる王朝が開かれた事だと思われる。ヒクソスによる国土の支配原因は、王家の権威が次第に弱まるにつれ、デルタ地域の防衛力が低下したことに起因している。ほぼ同時期に立った第15・16王朝の王達の名前を見ても、誕生名である「サア・ラー名」がエジプト独自のものではなく、他文化の流れをくむ名前である事が一目で理解できる。しかし、デルタ地域を支配した第15王朝とアヴァリス地域を支配した第16王朝の王達は王として即位する際、伝統的な行政形態や図像表現に対して忠実に倣い、伝統的なエジプト王の称号を採用した。

ヒクソス系の王朝に反し、下エジプトのテーベでは、エジプト人による国土統一を掲げ、第15王朝と同時期に第17王朝が立った。第17王朝期の王の記録は、第15・16王朝と同じくはっきりとした年代はまだ分かっていないが、異民族のヒクソスに対して、エジプト土着の政権として機能していた。その後、第17王朝の王達はヒクソス王朝と何度も戦闘を繰り返し、17王朝最後の王カァメス(紀元前1555年頃～1550年頃)の息子、イアフメス(紀元前1550年頃～1525年頃)が第18王朝を築き、古代エジプトが最も栄えた新王国時代となる。

新王国時代(紀元前1550年頃～1295年頃)は、デルタ地帯を支配していたヒクソスを放逐した、テーベ地域の王朝によって創始され歴史上最大の領地を獲得した時代である。エジプト人の手によって再び国土を統一した第18王朝(紀元前1550年頃～1295年頃)は、トトメス3世(紀元前1479年頃～1425年頃)の治世時には、積極的にアジア遠征と遠征後の植民地化政策が行われ、結果各地からの朝貢品や交易の影響で経済的・文化的な発展を遂げる。特にそれらを象徴するのが、デイル・アル・メディーナに作られた職人達の村である。職人達の村が作られた事により、エジプトの建築物も含めた芸術作品は表現が様式化され、最も美しい表現が為されるようになった。だが、経済的・文化的な発展を迎えた一方で、国土の統一によって力を得たアメン神官

団の影響により、王が神殿を無視できない政治状況を作り上げた。神官団が力を得た事によって政治介入が始まると、王は神官団の権力の弱小化を狙い、アメンヘテプ4世(紀元前1352年頃～1336年頃)による宗教改革¹⁷が行われる事になるが、後にこの宗教改革下の影響でエジプトはトトメス3世時代に得た多くの植民地を失う事となり、国力の低下を招いた。後の第19王朝(紀元前1295年頃～1186年頃)のセティ1世のアビュドスの王名表には、アメンヘテプ4世を含め以後の4人の王¹⁸の名前が、国に混乱を招いた王の系列と見なされ、名前が刻まれていない。他にも、アメンヘテプ4世と共にテーベで共同統治を行っていた人物とその家族と思われる棺が発見されたが、棺からは名前が故意に削り取られていた。王の葬儀を執り行う神官や家臣達からこの時代の王達は王として存在してはならない、国の秩序に混乱をもたらした異端者達として処分されたと考えられる。

アメンホテプ4世の宗教改革によって引き起こされた国の弱体化は、第19王朝の王達によって再び強固なものとして確立されるようになった。第19王朝は第18王朝最後の王であるホレムヘブ王の側近が、王位を譲り受けた形で開いた王朝であり、この王朝の初期の目標は、アメンホテプ4世以降発展したアマルナ文化¹⁹の排除と、弱体化した国を対外遠征と植民地化政策による国の強化だった。第18王朝及び第19王朝時代、エジプト最大の敵対国は、チグリシ・ユーフラテス河地域に帝国を築いたヒッタイト帝国はこの当時、ミタンニ王国を滅ぼし、エジプトの植民地までも占領していた。ラムセス2世(紀元前1279年頃～1213年頃)の治世下では、ヒッタイトから植民地を取り返す為、対ヒッタイト戦を行い国の強化に努めた。ラムセス2世の統治時代は、王の長期政権(67年間国を統治し、エジプトで2番目に長い期間王位に就いていた)、積極的な植民地政策、公共事業の活性化によってアメンホテプ4世以前の国力を取り戻す事が出来たが長い統治の結果、一説には側室が産んだ子供も含め100人を越えた王位継承者と、後継ぎとしていた王子達に先立たれ、残された王子達による王位継承権争いと、短命の王が続き国土の管理力の低下が原因で第19王朝は断絶した。

第19王朝の断絶によって新たに第20王朝(紀元前1186年頃～1069年頃)が立つと、第20王朝の王達はラムセスの名を誕生名として積極的に使

用した。血縁関係の無い王の名を引き継ぐ行為は、ラメセス2世の築いた長期政権の中で残されていた業績の数々が、理想の王としてのありかたと考えられ、ラメセス2世にあやかり採用した名前であり、9人の王がラメセス名を名乗った。新王朝の設立と、ラメセス2世にあやかった名を名乗った王達が国を治めたが、第20王朝は2代目の王であるラムセス3世(紀元前1184年頃～1153年頃)の死後、過去の王朝が混乱し、断絶した原因である短命の王が続いた。短命の王が続いた中、第20王朝下では王権の破状による王墓の盗掘、権力と権威の分離が問題となり、王朝末期には権力を手にしたテーベのアメン神殿の大司祭が即位を宣言し、2つの王朝の誕生と共に多数の王朝が並立する第3中間期に突入し、新王国時代は幕を閉じる事となる。

第2中間期と新王国時代の王権観の特徴は、まず第1に異民族(ヒクソス)による王権の宣言と、エジプト土着の王朝による王権争いである。異民族の王達は、王権を宣言する際自身の文化を大々的に使用するのではなく、従来の王達に使用されていた伝統的な王の称号を使用し、王として即位した。これは、自身の文化を使用するのではなく、エジプト古来の伝統に則った支配体系をとる事で、支配地域の民の不満を抑えるための方法だったと捉える事が出来る。第2に、「アメン神の聖妻」という王妃の称号の使用である。初期王朝時代から、エジプトの王達は血の純粋性を守るため、王は嫡出の王女である姉妹、もしくは先王の王女を正妃とし婚姻を結ばなければならなかったとされている。その為、王妃の称号の採用によって、アメン神の妻である女性を妻に迎える行為は、王自身の神格化を意味するのと共に、正妃と王の間に生まれた子供が正統な王の後継者であり、王権の行使者として絶大な力を手にする事を表現した。第3に、宗教改革を行ったアメンホテプ4世は、太陽神の一つであるアテン神を唯一神として信仰し、アメン・ラー神を信仰するアメン神官団から離れるため改名と遷都を行ったが、伝統的な王の称号の「サァー・ラー名」を使用し続けたその事から、王権の行使には伝統的な称号を使用しなければならないと推測できるのではないだろうか。第4に、第20王朝末期に起きた王の形式化である。本来、国土を統一する王の在位中は、他者が伝統的な王の称号を使用する事は許されない事ではあるが、テーベの大司祭が王の称号を使用した経緯から、既に王は王権の行使を行えない程、王朝が弱体化していたと考える事が出来る。

以上が第2中間期と新王国時代の王権観の流れであり、第20王朝末期、テーベの大司祭が王権を宣言し、第3中間期となる。

1-4 第3中間期・末期王朝時代

第20王朝の終焉と共に、エジプトは再び王朝が並立する混乱期を迎える事となったが、第3中間期は非常に複雑な時代だと言える。第3中間期は並立する王朝と、形式的に短期間ではあるが国を統一した王朝が繰り返されるが、その中には異民族(ヌビア系王朝・リビア系王朝)も含まれた。その複雑さは特に、紀元前818年頃以降、第22・23・24・25王朝が並立し、上下のエジプトの2分や、それまでの州侯による王権宣言時と比べ、より都市国家的な王朝設立に近いものがある。中でも、デルタ地域で王朝を開いていた、レオントポリスを拠点とするリビア系の第23王朝(紀元前818年頃～715年頃)、サイスを拠点とする第24王朝(紀元前727年頃～715年頃)の乱立である。紀元前747年には、ヌビア系の王朝の第25王朝がテーベで立つが、初めはテーベを中心に上エジプトを領土とし、下エジプトの支配権はもっていなかった。最終的には第25王朝が短期間国を統治する事となる。しかし、100年も経たないうちに、王朝はアッシリア帝国に領土を奪われる事となった。アッシリア帝国による国土の占領は、エジプト史上初めて他民族によって領地の全てが奪われた出来事である。

一旦はアッシリア帝国によるエジプト全土の統治が始まると思われたが、意外な事にエジプト統治直後、バビロニアで起きた反乱により、エジプトを支配下に置いていたアッシリア王は、統治を家臣であるプサメティク1世(紀元前664年～610年)に任せ帰国をした。アッシリア王に統治を任命されたプサメティス1世は、第26王朝(紀元前664年～525年)を開き末期王朝時代(紀元前747年頃～332年頃)が始まった。

末期王朝時代の特徴は、まず第1に異民族によるエジプト全土の支配、第2にエジプト文化を排除しようとするペルシャの統治、第3に自国の軍事力のみでは、国を守れないほど諸外国の軍事力が成長した事であり、エジプト王朝は諸外国の情勢に常に振り回される形となった。

末期王朝時代最初の王朝である第26王朝は初め、アッシリアからの独立を図るため、アッシリアと敵対する国と積極的に同盟を組み、ギリシャ人の傭兵を雇ったとしている。対外政策も盛んにおこない、パレスティナからシリアまでの支配権を獲得したが、数年の後に新バビロニア王国のネブガルド2世との戦いによって、支配権を失った。その後、第26王朝は当時オリエント地域で大きな勢力を誇るペルシャと戦いで敗北し、第1次ペルシャ支配期(第27王朝(紀元前525年～404年))が始まった。第27王朝のペルシャ支配期は、エジプトを支配した王が国土を直接支配する方法ではなく、州長官の派遣による統治であり、属州としての扱いだたとされている。それを証明する記録は、ペルシャによる植民地化政策²⁰であり、それまでの他民族の王朝による支配時にも経験した事の無い支配体系だった。紀元前486年頃エジプトは、ペルシャからの独立を図るため、ギリシャに穀物の提供を条件に、ギリシャ軍の援助を得た。ギリシャからの援助によって、ダリウス2世(紀元前424年～405年)死後、サイスを拠点とするアミュルタイオス王(紀元前404年～399年)によって第28王朝が開かれるが、1代で王朝は終わり血縁関係の無い王によって王位の継承がなされた、第29王朝(紀元前399年～380年)が立った。第29王朝の時代、再びペルシャからの侵攻によって脅かされた。ペルシャ軍によるエジプト侵攻は、ギリシャの傭兵によって防ぐ事が出来たが、直後に王位の篡奪によって第30王朝(紀元前380年～332年)が立ち、第29王朝も19年という短い期間で幕を閉じた。

王位の篡奪によって王朝を開いた軍出身のネクタネボ1世(紀元前380年～362年)はそれまでの王位篡奪者とは違い、クーデターによる即位を隠す事はしなかった。このことは、対ペルシャを常に念頭に置いていた時代を象徴するものであり、武力に秀でた人物であれば、王として認められると言う考えがなされるようになってきたのではないかと考えられる。しかし、王位の篡奪によって開いた王朝も、50年程で再びペルシャの侵入を許し²¹、3000年以上続いたエジプト王朝は終焉を迎えたのである。

第3中間期と末期王朝時代の王権に対する特徴は、第1にエジプトの国土を全て掌握した異民族の王による王権の宣言である。この時代の異民族による王の王権宣言には、2つのパターンがあった。1つはヌビア・リビア系の、新王

国時代に植民地化政策の影響で、エジプト文化に慣れ親しんだ民族による王権宣言であり、彼等はエジプト文化や宗教の教育を受けていた事から、エジプトの文化を尊重し、比較的国内の反発が少なかったとされている。反対にペルシャによる支配時期は、エジプトの文化を排除する傾向が強く、それまで他文化をそのまま受け入れた事の無いエジプト人にとって、暗黒の時代と捉えられたため独立運動が盛んに行われていた。第2に王の称号の表記の仕方に変化が見られた事である。従来までは全ての国土を支配していない王ですら、上下エジプトの支配を象徴するスゲとミツバチを記した「スネウ・ビト名」を使用していたが、デルタ地域を支配していた王の中には、スゲのみを使用した王名を採用していた例がある。特に、第25王朝を創始したピアンキは戦勝報告の碑に、支配した地域の王の名に、スゲのみを刻み、ミツバチを描いていなかった。第3に「アメン神の聖妻」の称号を持つ人物の影響力の増大である。本来であれば、「アメン神の聖妻」の称号は、王の正妃であり、後継ぎの母にあたる人物が持つ称号であったが、次第にテーベに司祭として派遣される王の娘が所持する称号に変化した。「アメン神の聖妻」の称号をもった王の娘、つまり王女は、アメン神殿の中で政治的・宗教的力を持つようになったとされている。次第に王位継承にまで影響する発言力を持つようになった。「アメン神の聖妻」の称号を持った王女は、日本で言うなれば伊勢神宮に斎王(斎宮)として派遣される内親王に、巨大な政治的権力を与えた様なものである。第4に、第25・26王朝で見られた復古主義である。この時代の美術様式は、ギリシャの写実的な様式が広まる半面、古王国時代の美術様式を重要視し真似ていた。その理由として、①古王国時代の絶対的な王の権威と国力を理想とし、それを真似る事によって恩恵を得る、②純粋なエジプト人によって国土を支配していなかったため、「古代エジプト的な」、「エジプトの伝統的な」を強調したかったのではないかと考えられるが、どちらが正しいかは現段階では推測できない。最後に、ヒエログリフ名が見られない王がいることである。本来であれば、王は即位後5つの王の称号を残し、王として王権の宣言を行うが、末期王朝時代の末の王達には、ヒエログリフ名が不明の王が数人存在する。中にはペルシャの王等のエジプト名を必要としない王もいたが、ヒエログリフが残されていない王の大半は、おそらく王として正式に即位を宣言する前、もしくは記念の建築物を建造する前

に死んだと考えられる。

以上が、古代エジプトの歴史的流れから推測される王権観の概略である。

〈注及び図一覧 一第1章一〉

-
- 10 吉村作治監修、『展覧会図録 ウィーン美術史美術館所蔵 古代エジプト展』、TBS、154頁
- 11 上エジプトとその王冠の後見を行う女神。王冠を擬人化した神で、伝統的な標識は禿鷹。「二女神」の一人。
- 12 下エジプトとその王冠の後見を行う女神。
- 13 リチャード・H・ウィルキンソン、伊藤はるみ(他訳)、『図解古代エジプトシンボル事典』、原書房、2000年、318頁
- 14 吉村作治、『前掲書』、268頁
- 15 『同上書』、270頁
- 16 『同上書』、320頁
- 17 第18王朝アメンホテプ4世(アクエンアテン)治世時に起きた、伝統的な神々への信仰を否定し、太陽神の一形態であるアテン神を唯一神とする改革。
- 18 アメンホテプ4世、スメンクカーラー王、ツタンカーメン王、アイ王
- 19 アメンホテプ4世の宗教改革によって派生した思想、文化、芸術様式の総称。
- 20 公用語をペルシアで使用されていたアラム語に定め、エジプト独自の文化を排除していたとされている。

第2章 古代エジプトにおける身体と死

2-1 古代エジプトの身体観

古代エジプト人の身体に対する考え方は、死生観と密接な関係によって成り立っていた。古代エジプト人は、人間の身体は肉体の他に5つの要素によって成り立っていると考えていた。しかし、身体を構成する要素は生前よりもむしろ、死後に重要性を置いていたとされている。それらの要素は生前に得られるものではなく、死後の世界で得なければならない物として、完璧な身体を得ることに大きな憧れを抱いていた。この死後に得るべき身体を構成する要素として考えられていたものが、「カー」、「バー」、「アク」、「名前」、「影」の5つの要素である。これらの5つの要素は、肉体の活力の源や、肉体の維持に必要な物理的要素である「カー」、「バー」、「アク」と、人間の中に宿る霊や魂と人間の存在そのものを守護する役割を持った、呪術的要素の「名前」と「影」の2つに分けられる。

「カー」[図6]²²は元々、古代エジプト人が人間や神の生命力を表現する為に使用していた言葉である。ヒエログリフでは、両腕を上げた形で表わし、生命を保つ役割を持つとされている。「カー」は、人が生まれら時に同時に生まれ、生き霊としての役割も持つ、いわば人間の分身としても考えられていたため、人間が生を終えても生き続ける事が出来る性質を持ち、生き霊でありながら食べ物を食すとされていた。その為、「カー」自身が活動する時は、人間が生前に食べていた物と同じ食事を摂取しなければならず、人間が死んだ後もカーの活動を可能にするため、埋葬品として墓の中に食物を入れるなど、供養に食物を捧げたりなどされていた。

「バー」は、人間を特徴づける肉体以外の全ての要素を含んでいるとされ、現代の人間の考え方から推測すると、人間の『人格』の概念と似通っている²³死後の人間は、完璧な身体である「アク」を手に入れるため、「カー」と合体する為の旅をする事を義務付けられていた。しかし、肉体は当然死後動かす事が出来ない。そこで、旅をしなければならない肉体の代わりに、「バー」がその代役を務め、「カー」と合体する為の旅を行った。「バー」は、鳥の身体に人間

の手と頭を持った姿で表記されている。これは古代エジプト人が、渡り鳥が冥界と墓を行き来する動物だと信じていたからである。渡り鳥と「バー」との関係は、クラハシコウと呼ばれるコウノトリの古代エジプト名が、「バー」という同じ音を持つ事からであるとされていたためと、季節を渡り歩く渡り鳥(クラハシコウ)の習慣を見た古代エジプト人が、コウノトリを「バー」の化身と考えるようになったのである。

図 4 ホル王のカー象



「バー」の最大の役割は、「カー」と合体し「アク」を手に入れるのと共に、死後の死者の肉体の永遠の存続を保つ事であった。その為、「バー」は毎夜棺の中に眠る肉体と合体²⁴し、「アク」と呼ばれる完全な身体になるのである。

人間は死後、完璧な身体を求める「カー」と「バー」の旅の結果、2つの要素の合体によって「アク」が誕生すると古代エジプト人は考えていた。「アク」

とは、「祝福された死者」と言う別名を持っていた要素であり、人間が最終的に得る事の出来る不滅の身体とされている。生前は肉体そのものとも捉える事が出来、「魂の家」とも呼ばれていた。この「祝福された死者」という別名は、死後に死者が冥界の神オシリスの前で行なう、再生復活の為の審判、「オシリスの審判」に由来を持つ。死者は死後、再生復活を掛け「オシリスの審判」を受けなければならなかったが、「オシリスの審判」を終え無事に再生復活を許された死者が、死後の世界で再び生前と同じ生活を送るためにとる姿が「アク」とされている。「アク」とはオシリスの審判によって、死後の生活を許された死者の「カー」と「バー」の複合体であり、「アク」となりえた死者は、永遠の不滅と不変を手に入れたものと称された。「アク」は普段、死者の似姿であるシャブティ²⁵のようなミイラの姿で表現された、死者の手足となる擬似的な肉体であった。

「カー」や「バー」、「アク」は古代エジプト人の概念から考えると、物質もしくは物質に宿るものという意識が強い。しかし、古代エジプト人は神に対する信仰心の強さから、呪術による呪いや、神と対する魔物によって、生命が脅かされる事があると考えていた。肉体や肉体に宿るものを守るため、霊的・呪術的な要素も身体の一部であると考えたのである。それが、「名前」と「影」の2つの要素なのだ。

古代エジプト人は「名前」を非常に重んじ、「名前」は人にとって不可欠な要素と見なしていた。「名前」の重要性は、かつて言霊への信仰を持っていた私達日本人にとって、非常に親しみを持つことが出来、なおかつ納得の出来る要素ではないのだろうか。かつての日本人と同じように、古代エジプト人は人や物の名前を非常に重要視し、何よりも重んじていたものの1つである。名前は個人がこの世に存在するために必ず必要なものとされ、名前を持たないものはこの世に存在しないものと見なされ、名前を持たないものは忌み嫌うべき者と嫌悪していた。「名前」は肉体と魂を繋げ、それらを守護する役目を持ち、この世に生まれた瞬間に、世界を創造した神々や両親、親族から与えられた初めての祝福であり、贈り物なのだとされていた。その重要性は、生前だけでなく死後も「カー」や「バー」、「アク」として生き続けるためには必要なものとして考えていた程であり、名前の消失によって、人間の存在を否定した例もある。第

18王朝(紀元前1550年頃～1295年頃)末期の王であるスメンクカアラ一王(紀元前1338年頃～1336年頃)の物と思われる棺や、スメンクカアラ一王の妃と思われるミイラ等がルクソール西岸、王家の谷第55号墓から発見されたが、発見された遺物の特徴は、持ち主の名前が故意に削り取られている点であった。古代エジプトでは、文字(ヒエログリフ)は神が作り出した最大の発明品の1つであり、文字で書かれた名前を消すという行為は、名前の持ち主の存在を否定し、再生復活を妨げる行為と見なされていた。それ以外にも、生後直後の名前が付けられていない赤子や、自我が芽生える前の子供、記憶喪失などで己の名前を忘れてしまった者等は、完全な肉体を持つものとして認められず、一種の恐怖の対象として見なされる事も少なくは無かった。

人々の名は、その当時国を統治していた王、有力な神、出生地の神にちなんだ名前を入れる事が多かった。人々の名は、王や神々を称える様な抽象的な名前が多用されていたといわれている。その最たる者が王であり、国を統治していた王は「～神に愛されし者」、「～神は美しい」、「～神は永遠なり」等の神を讃える名を所持し、神の力や守護を得るため、神の名を名前に組み込んでいた。

「名前」の重要性は、名前が単なる抽象的なものであるだけでなく、その名で呼ばれる現象そのものの物理的な顕現として、言葉や名前が持っていた重要性は、シャバト・ストーンに刻まれた、いわゆる「メンフィス神学」によって裏書きされている。「そのなかでプタハ神は宇宙の万物をその名前をひとつひとつ唱えることによって、創造しているのである」²⁶とあるように、「名前」の所有者の本質と人格を作り上げるためにも必要な要素であった。

「名前」と同じく、人間個人の本質であり、人を危害から守る最後の要素が「影」である。「影」は別名《付き従う者》と呼ばれ、身体を構成する要素の中で最も本質的な部分であり、大切なものと論じられている。先にあげた4つの要素「カー」「バー」「アク」「名前」は、この世に生まれ出た瞬間から個人と生死を共にすると伝えられているが、「影」は母親の胎内に居る時から、個人と共に存在したと言われ、子供を妊娠した事がわかった瞬間から、《個人に付き従う存在》《個人の分身》もしくは《個人そのもの》と古代エジプト人は信じていた。「影」は「名前」と同じく、個人の存在を証明するものとされ、実際にはありえないが影が無いものもこの世に存在していることを認められなかった

古代エジプト人は、以上の「カー」、「バー」、「アク」、「名前」、「影」の5つを、肉体以外の身体を構成する全ての要素とみなし、この5つ全てが揃わなければ、肉体は完全な形を保てず、災厄・病気・怪我・から、自身や家族、周囲に降りかかる不幸から身と心を守ることが出来ないものとしていた。

2-2 古代エジプトの死生観(葬祭信仰)

古代エジプトの死生観(葬祭信仰)に関する書物は、第5王朝のウナス王(紀元前2375 - 2345)のピラミッドに刻まれている、ピラミッド・テキスト(Pyramid Text)を初めとし、初期の頃は王のみが使用を許されたものだった。しかし、第一中間期(紀元前2181 - 2055)の時代、ピラミッド・テキストはコフィン・テキスト(Coffin Texts)と呼ばれる棺柩文に形を変え、王以外の人間にも刻まれる慣習が生まれた。その後、コフィン・テキスト内の一部が重要視されるようになり、死者の書と呼ばれる葬祭文章が描かれるようになり、死後に対する信仰が最高潮に達したとされている。これらの葬祭文章や、現在までに発見されている墳墓、それに追従する神殿のみでしか、古代エジプトの死生観や来世信仰を見る事が出来ないが、多くの葬祭文章や墓が現代に残されている事から、エジプトにおける死生観への信仰と複雑さの時代による変化を研究する事は可能とされているが、反対に文字を持たない統一王朝以前の死生観は更に多くの研究が必要とされており、推測することしか出来ないのが現状である。

現在に残されている史料や文献によると、古代エジプト人は人間の身体が肉体だけでなく「カー」、「バー」、「アク」、「名前」、「影」の要素から成り立つことはすでに前項でも述べたが、これらの要素は人間の現世の生と、死後の生両方共に、欠ける事の許されない、に不可欠なものだったとされていた。人間の死後の生活は、この5つの要素を十分に維持し、周囲から受ける危険から守らなければならなかった。5つの要素の維持と危険から守るための初歩的な段階は遺体をミイラとし、副葬品と一緒に埋葬する事で実現されることとなる。

古代エジプト王朝が確立されていた時代では、生と死に対する考えが2つの柱とされる思想に大きく影響を受けていたとされている。その1つは、死は生

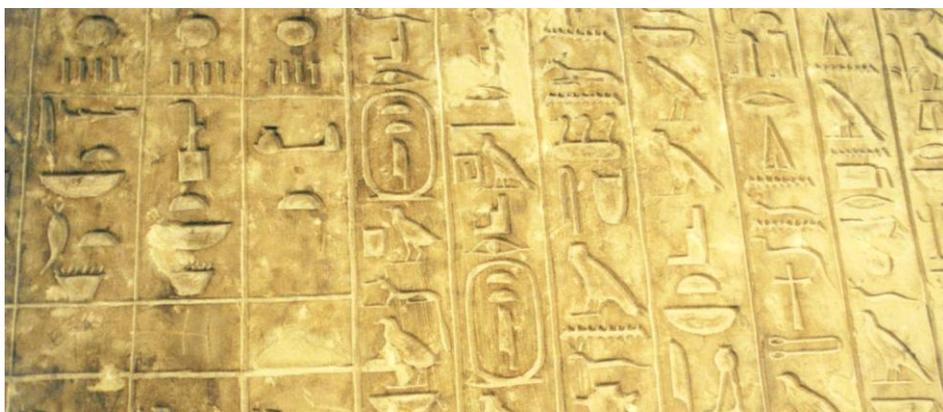
の完全なおわりではなく、一時的な休止にすぎないというものであり、2つめは、神への敬虔な信仰、ミイラ作りによる肉体の保存、彫像やそのほかの副葬品の準備など様々な手段で、永遠の生が保証されうるというものである」²⁷

永遠の生を象徴する死後の世界についての記述は、非常に多く残されているが、葬祭文章が書かれた時代、持ち主の身分と地位等によって違いが見られる。

「現存する葬祭文章には、死後の世界についてしばしば互いに矛盾する記述がみられ、そのなかには、人間が周極星に変身するという記述から、葦の野と表現されることもある死後の世界で、普通の人生を続けるという記述まである。王ばかりでなく王以外の人々のための葬祭文章や葬祭儀式で～中略～オシリスに死者が同一化する部分が重要な位置を占めていた」²⁸ともあり、古代エジプト人は死後に対して非常に大きな関心を抱いていた。特に現世の生を終えてから、死後の生を得るまでの過程を古代エジプト人は重要視し、その過程を文章として墓や棺、パピルス紙に残した。

最古の葬祭文章は、ピラミッド・テキスト[図7]²⁹と呼ばれ、古王国時代後期と第1中間期の、現在までに発見されている9つのピラミッドの通路、玄室、壁画に描かれた800にも及ぶ呪文があり、現存する最古のピラミッド・テキストは、サッカラにあるウナス王のピラミッドに刻まれているものである。

図7 ピラミッド・テキストの一部



古王国時代までの死生観の特徴は、来世は王のみしか得る事が出来ず、来世というものは王の特権であり、王は死後冥界の神であるオシリス神と同化し神となるとされていた。そのため王に仕えていた者達は、死後神になる王の恩恵を得るために、マスタバ墳をピラミッドの周りに造営した。本来ならば、来世を得る事が出来なかった人々は、王への死後の忠誠を誓う事によってのみ、来世が約束されていた。しかし、古王国時代末期から王権の弱体化が進み、官僚や地方役人はマスタバ墳を王の墓の周辺ではない自由な場所に作るようになったのである。

官僚や地方役人のマスタバ墳が自由に建造されるようになった古王国時代末期頃から、王のみに使用されていた葬祭文章は、王以外の人物にも使用されるようになる。これらを総じて、コフィン・テキスト(棺柩文)と呼ぶ。コフィン・テキストは、1000以上の呪文からなる用語であり、第11王朝以後の中王国時代では官僚や役人の等の棺に記されるようになった。コフィン・テキストの内容は、ピラミッド・テキストと同じく、来世での生活を保障するものであり、王の葬祭信仰に関わる事がなくとも、誰でも来世を得る事が出来る³⁰という、新しい思想がヒエログリフで棺の中に記されているのである。

葬祭文章としてのコフィン・テキストは、その後第2中間期末まで使用されたが、新王国時代に入るとおよそ200の呪文、あるいは章からなる、「死者の書」に形を変えた。呪文の内容は、それまで使用されていたコフィン・テキストや、それ以前のピラミッド・テキストを起源とし、それまでの葬祭文章からより冥界に関しての詳しい記述が記されている。特に詳しく記されている内容は、オシリスの審判と呼ばれる、死後再生復活する際の最大の山場である。オシリスの審判とは、「オシリスとマアト(「神の秩序」)の諸々の側面を表わす42人の「判事」との前で、死者が最後の審判を心臓とマアトの羽根の重さを量りで比べるという形をとったが、この儀式で重要なのは判事達1人1人に名ざしで呼びかけ、それぞれ判事達に関わりのある「否定告白」をすることだった³¹という場面であり、否定告白の結果によって、再生復活か魂の消滅のどちらかが決まるのだ。

オシリスの審判と否定告白の結果、オシリス神によって永遠の生を認められた魂は、完全なる生を完成させるために、ミイラ化された肉体の中に宿る「カ

一」と同化し、完全なる肉体「アク」となることが許され、来世が約束された。

死後に対する信仰は古代エジプトだけでなく、様々な地域で死後の世界、来世は重きを置かれていた。仏教の極楽浄土やキリスト教の天国に対する思想がそれに相当し、死後に得られる来世への信仰は、その地域によっても過程が分かれる。例えるならば、現世での生活環境があまりにも酷い状況であれば、死んだ後の魂が救われるように、死後の来世を信仰する場合と、反対に現世の生活が豊かで掛け替えのないものであり、死後もその生活を続けたいと望むパターンである。前者であれば、下層階級に爆発的に普及されたキリスト教の教えや、武士や穢れを請け負う職業者や女性によって広まった阿弥陀如来信仰の浄土宗や浄土真宗であり、後者を指すならば豊かな生活をおくっていたエジプトの葬祭信仰となる。

しかし、現世の生活を死後も贈りたいと願っていたエジプト人ではあるが、必ずしもそれだけが理由だと言い切る事は出来ない。ナイル川や植民地からの朝貢品、交易により莫大な財を築き、経済的に富んでいたエジプトではあるが、死に対して楽天的に考えていたばかりではなかった。たびたび訪れる混乱期と影響を受ける社会情勢、自然環境の厳しさに対する不安もあったのではないのだろうか。それ以外にも、古代エジプト人の一般的な平均寿命も現在では判明しており³²、寿命が短かった事も含め、現世の生活を死後も楽しみたいと熱望したことが、多くの葬祭文章によって古代エジプト人は来世に対しての執着心を持つようになった理由の1つとして考えられるのではないのだろうか。

一方、古代エジプトの死生観とは間逆の、来世に対して非常に否定的な文明もあった。それは、エジプトと比較的近い地域であり、同じ古代文明を築いたメソポタミア(オリエント)地域の人々によって信じられていた思想である。メソポタミア地域の人々は、人間の生と死に関しての考えはエジプト人ほど積極的な思想を持ち得る事は無かった。古代メソポタミア地域の人々は、人間とは、はじめから決められていた運命によって、2つのつながった存在形態が定められているとし、死に対してもそれは人間の本性と運命として定められたものであって、神々がそう望みそう決めたのである³³と考え、人間は死後泥に塗れ埃を食事とし、冥界の地を這いずりまわると考え、ギルガメシュ叙事詩³⁴やイシュタル(イナンナ)の冥界下り³⁵にも、死は陰惨で暗く穢れ、おぞましきそのも

であり、神ですら逆らう事が出来ないという描写が描かれている。信じる神や宗教体系は違えど、周辺地域にも関わらずメソポタミア地域の人々はエジプトとは相反する死生観を信仰していた。

2-3 死と身体

古代エジプト人は、完璧な身体は死によって完全な形を得、永遠の生を生きると前項で述べたが、それは死後の遺体処理が行われる事を前提にした、形式化された葬祭様式によって最終的に得られるものであるとしていた。古代エジプトは、ナイル川を中心に、砂漠の大地と住居地である植物に富んだ地区、乾燥した空気と砂嵐が発生する乾季とは正反対の、農作物の豊作を約束させるナイル川の氾濫、暑い昼と寒い夜、キツイ日差しの太陽と弱い光の日の入り等の二元性に富んだ自然環境を持っていた。一見厳しくも見えるが、古代エジプト人はナイル川の氾濫によって得た富によって、自然環境に対しての大きな依存と、自然に対する壮大なイメージを持つようになった。古代エジプト人が持っていた自然環境のイメージは、先にも述べた通り、日々の生活の中で見る事が出来る二元性に富んだ、毎年繰り返される季節の移り変わりや、日の出と日の入り、ナイル川の氾濫によって齎される農作物の収穫等の、自然環境のサイクルである。古代エジプト人は、自然環境を神秘的な神として擬人化し崇拝していたが、自然環境の中で起こるサイクルは、古代エジプト人にとって死した後には再び生を受け、何度も復活するという、永遠のサイクルに見えたのも理由として述べる事が出来る。

自然環境のサイクルから発生した生と死のサイクルと共に、死後の再生復活と言う死生観が生まれた理由は、エジプトが統一王朝として確立される、紀元前3100年以前から行われていた、埋葬方法の影響もあるのではないかと考えられる。その埋葬方法の影響から、古代エジプト人の独特な死生観(来世観)が生まれ、死後の再生復活とミイラ作りの原点に繋がった。

今日までの研究で、古代エジプト人の埋葬方法は死者の肉体をミイラに作り替え、手をかけて作った棺の中にミイラを納め、多くの副葬品と共に埋葬すると、一般的に知られているが、遺体をミイラにし、棺の中に埋葬する方法は、

エジプトが統一された後に、エジプト全土に広がった埋葬法である。それ以前は、ミイラを棺の中に埋葬するのではなく、土葬又は火葬が埋葬方法の主流であった。

「先王朝時代の埋葬では、死体は胎児のように体を折り曲げた姿勢で、時には動物の皮やマットで包まれて、耕地の縁辺部にある砂漠に掘った浅い穴に埋められた」³⁶ともあり、古代エジプトに農耕が発足した時代から既に、エジプト人はナイル川の氾濫によって育まれる新たな生命(植物)が宿る土地に、死が訪れる事を忌み嫌い、遺体を居住区である耕地に埋葬する事はしなかった。古代エジプト人の初期の埋葬方法は、僅かな埋葬品と共に、遺体を剥き出しもしくは布に巻いて死者を砂漠に埋葬をしていた。一部地域では、紀元前3500年頃から遺体に布を巻き埋葬する方法が取られ、既に内臓の摘出と樹脂による防腐処置も施されている物も確認されており、後のミイラ制作の原点ではないかと考えられている。

初期の埋葬方法によって砂漠へと埋葬されて遺体は、内臓の摘出や樹脂による防腐処置ではなく、遺体の周りにあった熱く乾燥した砂によって遺体の保存を可能にした。砂によって乾燥した当時の遺体は、その影響から完璧な形で発見され、現在も保存されている。[図8]³⁷

図 8 紀元前3200年頃 先王朝時代の遺体写真



王朝が統一されるまでの遺体の処理方法は、手をかける必要も無く、砂漠の砂の影響ので、腐敗する事の無い遺体を維持する事が出来た。これは乾燥した

熱い砂漠の砂によって脱水反応が起こり、結果遺体は腐る事無く残ったのだ。しかし、統一王朝が始まる頃には、王権の誇示を図るため、遺体の保護と埋葬に手をかけるようになり、墓室に遺体を納めるようになる。結果、それまで遺体の腐敗を阻止していた砂と遺体を隔離する事となり、手をかけた事によって、遺体は腐敗するようになった。墓室の使用と遺体と砂の隔離によって生じた遺体の腐敗は、その後人工的に腐敗を止めようとする古代エジプト人の手によって、ミイラ作りの技術が発達する事となる。そもそも、遺体を処理しミイラを制作する理由は、死後肉体から離れた魂を再び宿し、来世での肉体である「アク」を作り出すためであり、その完遂度を向上させるため、ミイラ作りの職人は内臓や脳、眼球の摘出などの様々な方法を取り、肉体の保存を可能としたのである。

〈注及び図一覧 一第2章一〉

-
- 22 近藤二郎解説、『芸術新潮』、新潮社、2009年、32頁
- 23 イアン・ショー、ポール・ニコルソン、内田杉彦(他訳)、「バー」、『大英博物館古代エジプト百科辞書』所収、株式会社原書房、1997年、408頁
- 24 昼間は太陽と共に天を巡って力を蓄え、夜は肉体に戻り「カー」と合体する。
- 25 普段はミイラの形をしている副葬品の小さな像。この像は、死者が来世での労働力として働かせる、死者の代理であり、召使である。
- 26 イアン・ショー、ポール・ニコルソン、「名前」、『前掲書』381～382頁
- 27 「葬祭信仰」、『同上書』298～297頁
- 28 「葬祭信仰」、『同上書』298～297頁
- 29 ピラミッドテキストの一部、1999年、著者自身による撮影
- 30 エジプト王の葬祭の特権である死後のオシリス神との同化が、王以外の人々によって行われるようになり、「来世の民主化」と総称されるが、必ずしも、王権への信仰が薄れてきたわけではない。
- 31 イアン・ショー、ポール・ニコルソン、「死者の書」、『前掲書』、220～221頁
- 32 吉村作治、店田廣文、「エジプトの高齢者・古代と現代」、『流動化社会と生活の質のプロジェクト・研究資料シリーズNo.6』(早稲田大学人間総合研究センター)、1990年、4頁
- 33 J・ポテロ、『メソポタミア 文学・理性・神々』、法政大学出版局、1998年、409頁
- 34 古代オリエントの最大の文学作品であり、ギルガメシュという英雄が、死に対する逃避と不死の探求を行った事が描かれている、世界最古の文学。
- 35 冥界から戻って来ないイシュタル(イナンナ)のために、従者パプスッカルがエンリルおよびシンに授けを求める段。
- 36 A・J スペンサー、小林朋則(他訳)、『大英博物館図説古代エジプト史』、株式会社原書房、2009年、121頁
- 37 『同上書』、121頁

第3章 器としての王の身体

古代エジプトにおいて、王の職務(役割)とは以下の通りである。

- ① 国家と社会秩序の中心人物である事
- ② 社会の秩序の維持
- ③ 国家の存続
- ④ 国民の無地息災に関する懸念と思想
- ⑤ 真実と正義の擬人化神「アマト」を満足させる
- ⑥ 神との交流
- ⑦ 神から与えられた地上の支配者としての職務の全う

上記の王の役割は、エジプトが統一国家として確立される以前の、先史王朝時代の都市国家の王や部族の首長達の日々の課題を原点としているが、エジプトの古い歴史を読み解くと、エジプトの国土の中心を流れるナイル川流域に人々が数十人単位の集団(部族)で住み着いたのは、紀元前約 8000 年頃の事である。その当時の生活は狩猟と採集を中心とした生活であり、農業はまだ行われていなかったとされている。紀元前約 5000 年ごろの上下エジプトの誕生までの間に、彼等は農業と牧畜を中心とした生活を送るようになったが、各都市の王や部族の首長達は、自身が治める土地の平和を守る事を第一の責務とし、王は統治者として戦士の長としての側面と、神官の長としての2つの側面を合わせ持ち、自身の国土を支配していた。王は戦士として国内の秩序をも守る保証者として、また神官として祭祀を行い、歴史を紡がなければならなかったとされているが、古代の王権下であった古代エジプトでの王の身体の神聖性、王の身体の本質的な意味を前章の身体観及び死生観等も結びつけ本章を論じる

3-1 国土としての王の身体

「王の身体=国、国土」と見なす思想は、古代社会に多く見られる王と神(神性)の一体化を意味し、王は神聖なる者、神聖王等と称され、王自身が神もしくは神の化身として崇められていた。王と神の一体化は「王=神」、「王=神の受

け皿」としての形があり、そのことは、フレーザーの *The golden bough*³⁸ や、『金枝篇』³⁹、H. Frankfort の *Kingship and the gods*⁴⁰ によっても論じられ、古代エジプトでもその様な条件のもと、国を王が治めいていた古代国家である。また、神聖王権の国を統治する王の特徴として、王自身が神話の中に生きる神や英雄の子孫とされる事が多い。とされている。身近な例で例えるならば、日本の天皇制は古来より「天皇＝太陽神(天照大神)の子孫」であり、神の末裔兼現人神としての性質を持っていた。その様な性質を持った天皇は、神道の祭祀長として日本の国土を統治してきた。

他にも、古代インドでは、「神々はヴィシュヌ神に『人間の中の第一人者(martebhyah sraisthya)』を示すようお願い出た。ヴィシュヌは自己の息子としてヴィラジャス(Virajas)を創出したが、彼は王位よりも出家を求め、結局、彼から数代あとのプリトゥ(Prthu)に至りはじめて理想的な王が出現した～中略～ヴィシュヌは王権を確立するため王の体内に入り、人民はプリトゥを人間の姿をした神として崇拝した。この様に王と神とは等しい存在である」⁴¹とし、王権の確立のため、王はその肉体にヴィシュヌ神を宿したとされている。

古代エジプトでは、王の誕生名の称号に使用される「サァ・ラー(太陽神ラーの息子)名」、「ホルス名」等にも表現される通り太陽神の息子、もしくは神話上の最初の王の息子の化身として肉体を通し神の意思を仲介、神官の長としての役割を担っていた。

古代の王権下では上記の様な多くの方法によって王権が確立されているが、それ等は全て国を統治するにあたって必要な要素でもあり、神聖なる王を崇める王権下では、王が所持する力というものは、国という大きなものですら越えた力を持った存在とされた。⁴²王が所持する力(王の身体に宿る力)は、国を豊かにする源でもあり、反対に国を滅ぼしかねない大きな力なのであるとした。

そのため、古代エジプトの王は王権行使の際、自身の血の正統性、神の代行者として国土の支配強調を、様々な方法で行ってきた。それ等を幾つか例として挙げると以下の通りである。

① 称号・象徴の使用

- ・ 5重称号 : 「ホルス名」「ネブティ名」「スネウ・ビト名」「黄金のホルス名」「サー・ラー名」
- ・ 王冠 : 「白冠(上エジプト)」「赤冠(下エジプト)」「二重冠(上下エジプト)」「ネメス頭巾(二女神の守護)」「アフネト頭」「カアト頭巾」「青冠(コブラの守護)」「アテフ冠」
- ・ 杖 : 「ヘカ」「ケネク」「ウアス」

② 祭祀 : 「セド祭」「オペト祭」等

③ 葬祭 : 「口開けの儀式」⁴³ 「オシリス神との同化」

④ 像 : 「玉座に座ったイシス女神から乳を与えられる幼児の姿の王」
「男性体(男装姿)のハトシェプスト女王像」等

⑤ 王家の婚姻制度

上記はごく一部の例であるが、その中でも特に王の王権行使を強調できるものが4つある。1つ目は王権の主張が像によって表現される、「玉座に座ったイシス女神から乳を与えられる幼児の姿の王」、2つ目も同じく像によって表現される「男性体(男装姿)のハトシェプスト女王像」、3つ目は王家で行われた近親者による婚姻であり、そして4つ目は葬祭によって王権の主張が表現される「オシリス神との同化」である。

1つ目の「玉座に座ったイシス女神から乳を与えられる幼児の姿の王」は、王が神の子であり、神の力を行使ししうる身体を持った事を象徴し、王位の正統性を表現するため、王朝下ではよく見られる例である。イシス女神はそもそも、神話の中で最初の王であり冥界の神であるオシリスの妹であり妻であった女神で、正統なる王位継承者ホルスの実母であったと記され、王の妻と王母としての役割も持っていた。イシス女神の名は「座席」とも訳され、女神自身も椅子のような形の図を頭上に置いている。古代エジプトの王位継承の仕組みは、先王の王女もしくは王妃を娶った男子が王として即位する事が慣例化されていたため、オシリスの妹であり妻であったイシスは、王位継承権の権利を象徴する王の椅子、すなわち玉座に相当する。その為、イシスに抱かれ乳を飲むと言う行

為は、正統なる王位継承者であり、玉座の守護神を母に持つという図式が成り立つのである。

2つ目は少々特殊な例で、「男性体(男装姿)のハトシェプスト女王像」である。ハトシェプスト女王(紀元前1475年頃～1458年頃)は、第18王朝期に王権を主張した女性である。彼女は元々トトメス2世(紀元前1492年頃～1479年頃)の妹であり王妃であったが、夫の死後自身の娘(王女)と婚姻を結んだ継子トトメス3世が幼少であり、トトメス3世の王妃となった自身の娘も幼かったため、摂政としてトトメス3世と共同統治を行ったとされている。ハトシェプスト女王は自身の王位の正統化と、女性が王位を主張するという特殊性を配慮したのか、女性でありながら「サア・ラー名」を使用し、公式行事の像・レリーフ等には男装で描かれ、身体つきも男性体で表現し、王冠をかぶり、鬚までも付けていた。実際には、「太陽神ラーの息子」を意味する、男性に用いられる「サア・ラー名」までもハトシェプスト女王は使用していた。中には王権を主張するに当たって、形式的に使用したと考えられる部分もあるが、彼女が国土の支配を強く主張する上で男性体を装う事は非常に重要な事だったと考えられる。

3つ目は、王と王妃間の近親結婚である。王が王位継承権を持つ王女もしくは王妃と婚姻を結ぶ事は、神話の中でも見られ⁴⁴、慣例化されていたと述べたが、これらは「兄弟と姉妹、父と娘の結婚の習慣も王家だけにかぎって行われていたように思われる。これは多分ひとつには、エジプト神話で一般的にみられる近親相姦を意図的に行うことが王の特権とされ、王と臣民を区別する上で効果的な手段とみなされていたからであろう」⁴⁵という、エジプト王家独自の近親婚の制度であり、臣民とは違う特殊な行為を行う事によって、王は何かしらの優位性を手にしたのだと思われる。それとは別に、親族間の婚姻を結ぶ理由には、王位継承者の子孫を外部に出さないため、もしくは一族内に他家の血を混ぜず、ただ純粹に血統を守る事によって、王権を行使していたのではないかと受け取れる。

上記の3点は、女神(王母)によって得た血統もしくは神力を行使する上での正統性、「サア・ラー名」や「ホルス名」を使用する男性名詞を使用するための条件としての男装もしくは男体表装、婚姻制度の特殊性によって得られる優

位性から得る事の出来る王権を示していた。しかしながら、この上記3点だけでは、王の神聖性や優位性等を見る事が出来るが、王の身体が国に影響を与えるという、神聖王権下による「王=国土」という図式を成り立たせる事は難しい。

そこで、4つ目の葬祭による王権の主張を表現した、「オシリスとの同化」に視点を置き、「王=国」という図式を示そうと思う。

「オシリス神との同化」に関して、古代エジプトの死生観から読み解くならば、中王国時代までにコフィン・テキストが作られるようになるまで、死後オシリス神と同化し、永遠の生を得られるのは王だけであったと、第1章と第2章の王権観の成立と、身体観と来世信仰でも述べてきた。「オシリスとの同化」に関して注目すべき点は、王が神であるオシリスと同化するまでの過程ではなく、エジプトの王達が王権の象徴として「ヘカ」と「ケネク」と呼ばれる杖を使用する事である。杖による王権の主張は、メソポタミア地域(オリエント周辺諸国)でも確認されている。⁴⁶古代バビロニアやアッシリアの王達は、玉座・冠・王杖・錫杖を神から授かる事で、王権を主張していた。エジプトでも同じように、杖は王権の象徴での1つであり、国内で信仰されていた神々も神の力を象徴するため、杖もしくは杖に準ずるものを手にして形で表現されていた。

古代エジプトで王権と結びついていたこの2つの杖は、農民が麦の収穫や脱穀の際に使用する道具が変化したものとされているが、元々はオシリス神が2本の杖を対にして持っていた姿を、王が真似したのだと考えられる。オシリス神は冥界の神であるのと同時に、復活と豊饒に関わる神として信仰されていた。そのためオシリスの元素は土と水、肌の色は植物もしくはナイル川の泥土を表わした緑で表現されていた。かつては王だたったオシリスが、こうしてエジプトの国土に結び付けられた事を考えるのならば、豊饒やナイル川の泥土を象徴するオシリス神の杖を、王が王権の象徴として使用すれば、王は生きながらにしてオシリス神の性質をその身に宿す事が出来るのではないかと推測できる。豊饒に関連する神であり、土と水からその身は構成され、ナイル川の泥土色の肌を持っていた神と同じ杖を王が持つ事によって、杖が媒体となり王の身体はオシリス神と同化し、「王の身体=エジプトの土(国土)と水(ナイル川)」という図式が作り上げられる。

「王の身体＝エジプトの土(国土)と水(ナイル川)」という図式が上記の理由によって成り立つのであれば、王の身体が衰弱すると王の力が弱まり、毎年多くの収穫をもたらすナイル川の氾濫水位が下がり、エジプトの大地は干からび、水不足により収穫物が取れず国民は飢えに苦しむという、古代王権下独特の王の超自然的な力というものが説明でき、セド祭の原点に辿り付く事が出来るのではないのだろうか。

3-2 神の力の受け皿としての身体

王権を象徴する杖を媒体とし、王はオシリスが持つ豊饒神としての性質を宿し、「王の身体＝エジプトの国土」が成り立つと前項で述べたが、それだけでは古代王権下における王の神聖性は十分に発揮できないと考えられる。そもそも、「王の身体＝国土」という図式は、王の身体に神の超越的な力が宿っている事が前提であり、王は神の力を宿す肉体がある事によって、前項でも述べた条件をクリアする事が出来たのではないのだろうか。

王の身体を器として象徴する祭礼は、日本の天皇を例として挙げることが可能である。日本の天皇制は現在世界でほとんど唯一連続した王朝を実現している⁴⁷とされ、実際にギネスブックにも、現存する最古の始祖を持つ連続した王朝と記載されている。天皇家の系図をその通りに辿るのならば、そのはじまりは初代神武帝、更には神話の中の神にまで遡ることになる。前項で王と神の一体化は「王＝神」、「王＝神の受け皿」としての形があり、王自身が神話の中に生きる神や英雄の子孫とされる事が多いと述べた。日本の天皇制はまさしくそれに当て嵌まる、神聖王権国家であった。天皇は、国家の最高神の子孫であるからこそ得る事が出来る神聖性によって、権威を維持する事が可能であったと考えられるが、ただ長い時間をかけて続いてきただけでは、神聖性が得られるわけではない。天皇の王権を象徴する、何かしらの条件が伴わなくてはならないのではないのだ。

そこで、本項では大嘗祭(だいじょうさい・おおにえのみまつり)と新嘗祭(にいなめのまつり)と呼ばれる宮中祭祀と、祭祀を行う天皇の権威の取得に目を向けてみた。

「大嘗祭とは、稲の永世と天皇霊位の永続性を祈る祭りのことだ。天皇の代替わりのときに行われる新嘗祭(にいなめのまつり・アキの収穫祭)を、特に大嘗祭と呼び習わしてきた」⁴⁸この祭祀は、日本の皇位継承において、非常に重要な意味をもつものである。新嘗祭は毎年 11 月の下旬に、天皇によって執り行われるが⁴⁹、宮中で開催される収穫祭でもあり、その年に収穫された新穀を始祖神(天照大神)と共に、天皇と一緒に食べる儀式である。これに対し、新帝が即位する際に行う儀式が大嘗祭と称される。新帝として即位する天皇は、大嘗祭の中で先帝の魂を鎮めるのと共に、「天皇霊」と呼ばれる天皇の身体に宿る魂、もしくは力そのものを宿す儀式とされている。「かつて天子は『スメミマノミコト』と呼ばれた。『スメ』は神聖を示す言葉、『ミマ』は肉体のことであるから、それは全体として、『神聖な肉体を持つ命』という意味にある。したがって、歴代の個々の天皇の体は、『魂の入れ物』だったのであり、この入れ物としてのスメミマノミコトのなかに天皇霊が入ってはじめてその天子は威力ある天子となる」⁵⁰という事が示されていたとするならば、そのため、日本における天皇の身体とはまさしく、「超越的な力(天皇霊)」の受け皿であり、それを肉体に宿す事によって天皇としての権威を発揮できたのである。⁵¹

また古代インドでは、人類最初の王の肉体にヴィシュヌ神が入り込み、人々は最初の王を人間の姿をした神であると信仰し、後の時代も王は神と等しい存在であると崇め、王は神の受け皿として神を受け入れ、神格化したものとされ、王の存在しない場所では人の繁栄はあり得ず、人間社会は崩壊し、王を崇拝せず邪心を持てば、必ず地獄に落ちるとされ、神の受け皿としての王の存在は絶大だった。

日本における大嘗祭や、古代インドの王権神授から得られた、「王の身体＝神の器」という思想は、古代エジプトでも、しばしば王による戦勝報告碑や、祭礼儀式によって描かれている。記念碑によって表記される「王＝神を宿す器」を表現させたものは、ラムセス 2 世によって描かれた、カデシュの戦いのレリーフがルクソールの神殿に残されている。

第 19 王朝のラムセス 2 世は、紀元前 1286 年にカデシュで起きた対ヒッタイト戦に関する戦いの浮き彫り中で、戦車に乗ったラムセス 2 世が果敢に敵兵を打ち負かすレリーフを残した。その中に描かれている王の姿は、「王＝神を

宿す器」を非常に強調させたレリーフである。このレリーフには、王が戦車に乗り敵に対して弓を放つ姿が刻まれているが、その姿はラムセス2世と、敵に弓を放つもう1人の人物が重なり合い、2重になって浮き彫りにされている。これは、戦士の長として敵兵を薙ぎ払うラムセス2世が神と共に敵を打つ、もしくは神がラムセス2世に乗り移り、その身に宿した神の力を巨大な力を行使し、敵を打ったと受け取る事が出来る。

また、祭礼やラムセス2世のレリーフの様なものとは違う、「王＝神を宿す器」という図式をあげるとすると、王の即位名である「スネウ・ビト名」を例とする事が出来る。「スネウ・ビト名」は、王が即位する際に与えられる名であり、王権の宣言を主張する最たるものである事は、第1章でも述べた。歴代の王達は、即位名を付けるにあたって、その名の中に神の名を組み込む事を習慣としていたとされている。古代エジプト人は、名前に神の名や当時の王の名に振った名を付けていたことは、第2章の身体観の項でも述べたが、王は神の守護を得るだけではなく、王自身が神である、もしくは神の魂を持つものとして宣言するため、即位名に規則を組み込んだ。

その規則を最も象徴するものとは、「太陽神ラーの魂 ～のもの」や、「太陽神ラーの心理 ～のもの」等の表記である。

魂とは古代エジプト語(ヒエログリフ)で「カー」と呼ばれていたが、「カー」は人間の生き霊、もしくは個々の存在の分身という性質を持っていた。古代エジプト人の「名前」に対する重要性に目を向けたのであれば、王の即位名に「太陽神ラーの魂 ～のもの」や、「太陽神ラーの心理 ～のもの」という文字を組み込む事によって、即位名を得た時点で古代エジプトの王は、太陽神ラーの「生き霊＝神の分身」を宿した事を意味し、「王＝神を宿す器」という図式を成立させる事を可能にしたのである。

³⁸ Frazer, J. G., *The Golden Bough, Part III*, Tokyo, 1913.

³⁹ フレイザー、永橋卓介(他訳)、『金枝篇(一)』、岩波文庫、1988年(1951年)

⁴⁰ H. Frankfort, *Kingship and the gods, A study of Ancient Near Eastern Religion as Integration of Society and Nature*, The University Chicago Press, Chicago 1948.

⁴¹ 山崎元一、『前掲書』、132～133頁

⁴² 国や共同体を越えたマクロコスモスとしての王の身体と、ミクロコスモスとしての国と民衆

⁴³ 死んだ王の跡を継ぐ者が、喪主として王の死後の再生を祈願し、王に生命の源であるアンクを与える場面を表わしている。

⁴⁴ オシリス神とイシス女神、セト神とネフティス女神、シュー神とヌト女神等の兄妹間の婚姻。

⁴⁵ イアン・ショー、ポール・ニコルソン、「結婚」、『前掲書』、170頁

⁴⁶ 月本昭男、『古代メソポタミアの神話と儀礼』、岩波書店、2010年、101～120頁

⁴⁷ 山折哲雄、『天皇の宮中祭祀と日本人』、日本文芸社、平成22年、37頁

⁴⁸ 『同上書』、40頁

⁴⁹ 2011年度の新嘗祭は、今上陛下のご入院により、皇太子殿下が代行された。

⁵⁰ 山折哲雄、『前掲書』、48頁

⁵¹ 漢字表記すると「スメ」＝「皇」、「スメミマ」＝「皇孫、子孫」、「スママノミコト」＝「皇孫命」、「ミマ」＝「御体」となる。

第4章 走行儀礼による王の神格化

4-1 走行儀礼と古代エジプトの王権の更新

古代エジプトでは、宗教的な儀礼が王権の更新と深く結びついていた文化であった。このことは、今日までの多くの研究で論じられ、本研究内でもすでに述べている。これはエジプトだけでなく、古代の国家に多く見られる傾向であり、前章で取り上げた、新嘗祭は日本の天皇家独自の収穫祭を伴った皇位更新祭である。古代メソポタミア地域にあったバビロニアでは、新年祭の際に王権の象徴である「王杖」、「輪」、「銚」、「冠」を一時的に王から取り上げ、祭祀によって王の資格が試された後に再び王に4つの王権の象徴が授与され儀式が組み込まれていた。この儀式は毎年地上の王権を更新する為の象徴的儀礼だとされている。

また、古代インドでは、王位の更新の際に特定の馬を放ち、馬が辿り付いた場所までが王の領土とする、王位の更新もしくは領土の獲得の儀式があった。⁵²古代エジプトでは、これに相当する儀式が、「セド祭」と呼ばれる王位更新儀礼であり、擬似的な「王殺し」が組み込まれた祭祀でもあった。

神聖王権下での「王殺し」とはそもそも、未開社会や古代王権に見られる慣習であり、王の身体は支配領域と結ばれ、王の老化や病による身体の弱体化は、身体に宿る力の行使が正常に行えず、国土の衰退、疫病や飢饉などの災厄を引き起こすと考えられ、衰弱した王を殺害し新王を新たに立てる事によって、国土を再生させるプロセスを意味している。

エジプトで行われていた「セド祭」は、王の即位後30年経の記念祭として行ない、その後3年毎に開催される、エジプト王制下での王の権威と力を具現化した中心的な儀礼であり、王が人々の前でランニングをする走行儀礼である。この儀礼は「セド祭」、「更新祭」、「更新の儀式」、「プタハ神⁵³の祭祀」、「ランニング祭」等とも呼ばれ、走行行為を伴った儀式を通称とした儀礼とし、古代エジプトの王権観と密接に結びついていた。儀礼はエジプト史の早い時期から行われていたと記録されている。

統一王朝以前の古い時代のエジプトでは、即位30年後の王は老いた事を理

由に後継者との代替わりの為、処刑もしくは強制退位の後に生涯幽閉とされ、退位後は罪人のような生活を送るとされていた。神の代理人たる存在はファラオと呼ばれる王ただ1人であり、先代の王は新王が神の力を宿すにあたって邪魔な存在とみなされていたからである。しかし、時代が進むにつれ、即位後30年の退位を拒む各都市の王等が、己の若さと強さが失われている事を家臣や国民にアピールする為、己の似姿(人形)を職人に製作させ、形式的な埋葬を行なった後、人々の前で走るという行為を行ない、擬似的な退位によって表わされる王の死と新王の即位を表現するようになった。

セド祭の原点は、走行儀礼を行なう国を長期間統治した王の身体的・精神的活力・権威の再生と復活を祈願し、家臣や国民、強大な諸外国へと復活したエジプト王の姿を示すこと、国土の領有を示す為に行われ、古代エジプトが統一国家となった、紀元前約3100年以降王の権威と権勢の復活を現す重要な宗教儀式の1つに置かれた。儀式の起源を辿ればエジプトの統一王朝が確立された時代よりも古く、統一王朝以前⁵⁴にエジプトで農耕が始まった時期にまで遡り、プトレマイオス王朝の断絶後、ローマ帝国の支配以後キリスト教の伝来と同時に布告された、キリスト以外の神の信仰を禁ずる法令によって生じたエジプト文化の終焉と共に、セド祭は行なわれることが無くなった。先王朝時代の詳しい資料は未だ少なく、詳しい事は判明していないが、少なくともセド祭は、3000年近くは続いた古代エジプトの重要な宮中祭祀であり、国家的な祭りであったことは確かであると言える。

走行儀礼を儀式の重要点とするセド祭の機能は、王の身体と魔術的な力の甦りを祈願する祭りであり、記念祭の儀式により王の力が回復し、ファラオは自分の職務が果たせるようになる。若返り、新しい権威を身につけた王は自分自身の後任を引き受けた⁵⁵とあるように、セド祭は死の儀式と再生復活が組み込まれた、古代エジプト人の死生観に則った儀式でもあった。第3章でも述べた、古代エジプトにおける王の7つの役割、王の身体に対する思想に則り、儀式が王朝の中で続いたとされる。

セド祭の中心となった儀式は、この儀礼が後に『ランニング祭』と呼ばれるようになった事からも理解できるが、走行行為、つまりランニングが最も重要な位置に置かれていた。儀礼の中で王は、走るという行為も含め国土の支配権

も象徴したと考えられる。そのことは、「サッカラにあるジョセルの階段ピラミッド複合体東側には～中略～『舞台装置』が組み込まれておりその形状は(様々なノモスの地方神の祠堂を表わす)『偽の』礼拝堂に囲まれた中庭となっている。～中略～王は上エジプトと下エジプトの王の記章を交互に身につけ、それぞれの王座にすわったものと考えられ、それによってエジプトの『2つの国土』に対する支配権を象徴したと思われる」⁵⁶とも残されている。他の王朝時代を通して、「セド祭」の浮き彫りに繰り返し表現された。

エジプト統一王朝以前(～紀元前3100年ごろ)は、即位30年後の王は老いた事を理由に後継者との代替わりの為、処刑もしくは強制退位の後に生涯幽閉とされ、退位後は罪人のような生活を送る先程も述べたが、これは神の代理人たる存在はファラオと呼ばれる王ただ1人であり、先代の王は新王にとって邪魔な存在とみなされていたからであり、このような行為は古代王権では比較的多くみられたしきたりでもある。しかし、時代が進むにつれ、即位後30年の退位を拒む各都市の王等が、己の若さと強さが失われていない事を家臣や国民にアピールする為、己の似姿(人形)を職人に製作させ、形式的な埋葬を行なった後、人々の前で走るという行為を行ない、擬似的な退位と新王の即位を儀礼の中で表現するようになった。実際には、30年間王の位についていた人物を排除しなくなった時期は未だ定かではないが、都市国家間の争いによって都市国家が少しずつ、1つの大きな国として成り立つようになり、戦争の回数が減少したことによって、戦場で戦える王が次第に求められなくなり、1人の王による長く安定した治世に対する比重が重くなったのではないかと考えられる。

4-2 儀礼的な王の死と、神との同化

前項でも述べたが、セド祭の機能は国を統治する王の肉体的・魔術的力を甦らせる儀式であり、王によって国土の支配権を象徴する儀礼である。前章では王の身体は国土と繋がりが国の繁栄に影響を与えると述べ、王が肉体的・魔術的力を蘇らす事が出来ず、肉体的・精神的に衰えを見せ、病気にかかり健康を害した場合や、年老いて王としての責務を果たせなくなった場合、毎年多くの収穫をもたらすナイル川の氾濫は無くなり、エジプトの大地は干からび、水不

足により収穫物が取れず国民は飢えに苦しむことになるという考えが生まれるという図式が生まれた。

しかし、1度年老いたものが若返る事は、決してあり得ない現象であるが、古代エジプト人がどの様にして王の肉体的・魔術的力を蘇らせるのか。を本項で述べていきたい。

王の若返り、もしくは活力の蘇りのキーワードとなるのが「儀礼的な王の死」から始まる、「王(人形)の埋葬」、「走行行為」、「王位更新の宣言」という流れである。古代エジプト人は、死後に得られる永遠の命を原点とし、現世を生きていたが、永遠の生を得るための第1条件はまず、死を迎える事であり、死んだ者しか蘇る事が出来ないと考えていた。生者は現在を生きている存在であり死を迎えた者ではない。その為セド祭を行なう王は古代エジプト人の死生観から考えて、肉体的・魔術的力を蘇らせる事は出来ないと考えた。「セド祭」の中にある王の儀礼的な死と走行行為は、古代エジプト文明に見られる身体観や死後の再生復活への宗教的思想から影響を受けたものであり、古代エジプト人の身体や再生復活については第2章でも述べた通りである。

その中でも特に注目する点は、儀式を行う「舞台装置」である。「サッカラにあるジョセルの階段ピラミッド複合体東側にはこの祭りの為の現存する最古の『舞台装置』が組み込まれておりその形状は(様々なノモスの地方神の祠堂を表わす)『偽の』礼拝堂に囲まれた中庭となっている」⁵⁷とされ、この「舞台装置は」、葬祭文章の中に描かれる「冥界巡りとオシリスの審判」に照らし合わせる事が出来ると考えた。古代エジプトでは、人は死後再生復活を行うためには42の判事達とオシリス神の前で否定告白をし、その判定の結果再生復活が許されるとしているが、葬祭文章のなかにある「死者の書」の中には、死者は「オシリスの審判」の前に、42の町の門をくぐり、冥界の神オシリスのいる場まで旅をする流れが描かれている。王位の更新儀礼である「セド祭」とエジプトに古来から信仰されている死生観とを関連付けるならば、「舞台装置」ないに置かれたノモスの地方神の祠堂は、冥界の中で死者が潜る町の門を表わし、走るという行為は、冥界の中を巡る、「冥界下り」の再現であり、走行行為を終えた王による王位の更新の宣言は、死者の魂である「バー」と「カー」が合体し、「アク」となった様子を実際に表現しているものと考えられる事を可能にした。

その為、セド祭の儀礼の初めに、王の似姿として作られた人形は、セド祭が行なわれる前に神官達によって埋葬される。王の似姿である人形の扱いに関しては、日本の文化にも根付いた雛祭りや、呪術に使用される呪いの藁人形とも少なからず共通する部分がある。雛祭りは江戸時代に入ると、災厄を人形に身代りさせるといふ祭礼的意味合いをもつようになったと現在に伝わっており、個人に起こりうる不幸を人形に移す事により成立する祭礼である。また、呪いの藁人形は呪いの対象者の身体の一部などを藁人形に潜ませ、釘で打ち付ければ呪いたい人間本人が、釘で打たれたところを怪我したり、病気になったりすると現代に伝えられている呪術である。古代では、人形は他人に呪いをかけるための呪詛の道具や、人間の身代わりに厄災を引き受けてくれる対象物として使われ、古代エジプトでも同じように人形は使用されていた。⁵⁸セド祭の祭祀のために王の似姿として作られた人形は、王と同じ名前を付けられる。第2章の身体観の中で「名前」について述べたが、名前は個人の存在を証明する呪術的な役割を持つと信じられていたことを前提におけば、王と同じ名前を付けられた人形は、王と同じ人生を歩み王と同じくエジプトを30年間統治していた老王そのものとして扱われ、王の代理として埋葬する事が可能になった。

〈注一覧 一第4章一〉

⁵² アシュベータ(馬礼祭)

⁵³ メンフィスの主神であり、メンフィス神学の最高神兼創造神。メンフィス3中神の1人。

⁵⁴ 先王朝時代(紀元前5500年頃~3100年頃)

⁵⁵ ヴォルフガング・デッカー、『前掲書』、39頁

⁵⁶ イアン・ショー、ポール・ニコルソン、「セド祭」、『前掲書』、278~280頁

⁵⁷ 「セド祭」、『同上書』、278~280頁

⁵⁸ 埋葬された人間に似せて作られた、死者の代理。死後、死者の代りに死者が仕事を一手に引き受ける。

結章

古代エジプトにおける王が行使した王権は、統一王朝が立って以降徐々に進展し、第5王朝期に最終形態として確立した。歴史の流れの中で、王権の捉え方は形を変えた。王権観の変化は、葬祭文章の中に描かれた死後の世界や、太陽信仰の確立、異民族による国土の支配等の影響によって明らかに示されている。

しかし、エジプトの王権下における王の性質と職務というものは、王権の変化に引き摺られることなく、王朝時代を通して変わることがなかった。それを表現したものが、王位更新儀礼として行われていた「セド祭」だったのと同時に、王と神との一体化を強調するものとして意味していた。

王と神との一体化は、神聖王権下における「王=国、国土」、「王の身体=神、神の力を宿す器」と等しいものであり、日本における大嘗祭と新嘗祭の実行、古代インドにおけるヴィシュヌ神とプリトゥの関係であり、古代エジプトでは王の即位名である「スネウ・ビト名」や、ラムセス2世の戦勝記念碑に残されたレリーフ、王杖を媒体とした神の力の受信、葬祭信仰に基づいたオシリス神との同化だったと言える。

これらは総じて、エジプト王朝が統一される以前の文化から引き継がれ、統一王朝以後さらなる発展を迎えた、宗教、自然環境、死生観、身体観の信仰のもと、自身の肉体とその身に宿る神の魂の力を蘇らせるための「セド祭」で、王は走行儀礼を行い、身体の神聖化を図ったとし、本研究のまとめとする。

参考文献一覧

〈和文〉

青木美子、『走る王～走行儀礼と古代エジプト人の死と再生～』、早稲田大学スポーツ科学部、2008年

青柳正美編集、『古代エジプトへの招待』、中央公論社、1981年

阿久津昌三、『アフリカの王権と祭祀—統治と権力の民俗学』、世界思想社、2007年

E・A. Ackerknecht、内田老鶴圃(他訳)、『世界医療史』、昭和58年

網野善彦他編、『岩波講座 天皇と王権を考える 第2巻 統治と権力』、岩波書店、2002年

網野善彦他編、『岩波講座 天皇と王権を考える 第8巻 コスモロジーと身体』、岩波書店、2002年

石川栄吉・大林忠夫他、『文化人類学事典』、弘文社、昭和62年

石上玄一郎、『エジプトの死者の書・宗教思想の根源を探る』、第三文明社、1989年

石上玄一郎、『輪廻と転生 死後の世界の探求』、人文書院、1977年

リチャード・H・ウィルキンソン、伊藤はるみ(他訳)、『図解古代エジプトシンボル事典』、株式会社原書房、2000年

リュック・ド・ウーシュ、浜本満・浜本まり子(他訳)、『アフリカの供儀』、株式会社みすず書房、1998年

内田杉彦、「古代エジプトの人と神々」、『明倫歯史』、7巻、1号、2004年、39～44頁

内田杉彦、「ピラミッドと王権」、『明倫歯史』、6巻、1号、2003年、55～61頁

内田杉彦、「古代エジプトの王妃と女王」、『同上書』、11巻、1号、2008年、45～52頁

ミルチア・エリアーデ、『世界宗教史①』、筑摩書房

岡田明子・小林登志子、『シュメール神話の世界』、中央公論新社、2008年

岡田温司、『キリストの身体 血と肉と愛の傷』、中央公論新社、2009年

尾形勇・加藤友康他編、「神器(レガリア)」、『歴史学事典』、弘文堂、平成17年

小川英雄、『古代オリエントの宗教』、エルサレム宗教文化研究所、昭和60年

小川衿恭他編、『社会人類学の可能性Ⅱ 象徴と権力』、弘文社、昭和63年

角田文衛他監修、『古代王権の誕生Ⅲ 中央ユーラシア・西アジア・北アフリカ』、角川書店、平成15年

梶田昭、『医学の歴史』、株式会社講談社、2003年

片岸直美、畑守泰子、村治笙子、『ナイルに生きる人々』、株式会社山川出版社、1997年

江淵一公他編、『儀礼と象徴 一文化人類学的考察一』、九州大学出版会、1983年

E・Hカントーロヴィチ、小林公(他訳)、『王の二つの身体(上・下)』、株式会社筑摩書房、2003年

S・N・クレーマー、小川英雄・森雅子(他訳)、『聖婚—古代シュメールの信仰・神話・儀礼』、株式会社新地書房、1989年

スタニスラフ・グロフ、川村邦光(他訳)、『死者の書 生死の手引』、株式会社平凡社、1995年3月20日

J・ゴンダ、鎧淳(他訳)、『インド思想史』、株式会社岩波書店、2002年

貞末僥司編、『マヤとインカ —王権の成立と展開—』、同成社、2005年

イアン・ショー / ポール・ニコルソン、『大英博物館古代エジプト百科事典』、株式会社 原書房、1997年

シンガー/アンダーウッド、『医学の歴史』、朝倉書店、1985年

エヴジェン・ストロウハル、内田利彦(他訳)、『図説 古代エジプトの生活誌(上・下巻)』、原書房、1996年

関和明、「古代エジプトにおける「セド祭殿」の建築形式について」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第447号、1993年、119～128頁

瀬戸邦弘、「古代エジプト新王国時代におけるスポーツと王権に付いて」、寒川恒夫編、『スポーツ人類学研究会』、日本スポーツ人類学学会、平成13年1月13日、29～53頁

竹沢尚一郎、『象徴と権力 —儀礼の一般理論』、株式会社勁草書房、1987年

月本昭男、『古代メソポタミアの神話と儀礼』株式会社岩波書店、2010年

ロザリー・デイヴィット リック・アーチボルト / 吉村作治 監訳、『ミイラ全身解剖』、講談社 2001年

W・デッカー、『古代エジプトの遊びとスポーツ』、財団法人 法政大学出版局、1995年

A. D. トウニー、ステファン・ヴェニヒ、『古代エジプトのスポーツ』、株式会社 ベースボール・マガジン社、1978年

藤縄 謙三、『歴史の父ヘロドトス』、新潮社、1986年6月15日

ジャック・ラカリエール解説 / 幸田雅礼訳、『エジプト・ヘロドトスの旅した大国』、新評論 1996年5月31日

ザヒ・ハワヌ / 吉村作治・西川厚 訳、『図説 古代エジプトの女性達』、滅書房 1998年1月22日

J・チェルニー、『エジプトの神々』、株式会社六興出版、1988年

仁田三男、『古代エジプト 王・神・墓』、河出書房新社、2002年

松朗健四郎、『古代宗教とスポーツ文化』、株式会社ベースボール・マガジン社、1989年

吉村作治、『ファラオの食卓・古代エジプト食物語』、小学館、1992年12月20日
高津道昭、『ピラミッドはなぜつくられたか』、新潮社、1992年6月15日
E・A・Wallis Budge、『古代エジプトの魔術 生と死の秘儀』、平河出版社、1982年
E・A・Wallis Budge、『世界最古の原典エジプトの死者の書』、たま出版、平成6年
古谷野晃、『古代エジプト 都市文明の誕生』、株式会社古今書房、1998年
フレイザー著、永橋卓介(他訳)、『金枝篇 1～5巻』、岩波文庫、1951年
ヘロドトス著、松平千秋(他訳)、『歴史』(上)、岩波書店、1971年 巻三 279～300頁
ジャケッタ・ホークス、『古代文明史2』、三陽社、1980年
J・ポテロ、『メソポタミア 文学・理性・神々』、法政大学出版局、1998年
J・ポテロ、『バビロンとバイブル』、法政大学出版局、2000年
J・ポテロ、『最古の宗教<古代メソポタミア>』、法政大学出版局、2001年
増田義郎、『古代アステカ王国』、中央公論社、昭和38年
増田義郎・吉村作治、『インカとエジプト』、株式会社岩波書店、2002年
松原正毅編、『王権の位相』、弘文社、平成3年
松本弥、『図説古代エジプト誌 古代エジプト美術手帳』、株式会社弥呂久、1996年
村治笙子、片岸直美、仁田三夫、『図説 エジプトの「死者の書」』、河出書房新社、2002年
村治笙子、『古代エジプト人の世界 ―壁画とヒエログリフを読む―』、岩波新書、2004年
ジョン・E・モービー、堀田卿弘(他訳)、『世界歴代王朝王名総監』、株式会社東洋書林、1993年 17
～26頁
アルフレッド・モーリー、『魔術と占星術』、白水社、1978年
安田喜憲、『大地母神の時代―ヨーロッパからの発想』、株式会社角川書店、平成3年
矢島文夫訳、『ギルガメシュ叙事詩』、株式会社筑摩書房、1998年
山折哲雄、『天皇の宮中祭祀と日本人』、日本文芸社、平成22年
山口昌男、『アフリカの神話的世界』、株式会社岩波書店、1971年
山崎元一、『古代インドの王権と宗教 ―王とバラモン』、刀水書房、1994年
ステファン・ロッシニ / リュト・シュマン＝アンテルム、『エジプトの神々事典』、株式会社 河出書房
新社、1997年
吉村作治、『貴族の墓のミイラたち』、日本放送出版協会、昭和63年
吉村作治・店田廣文、『エジプトの高齢者・古代と現代』(流動化社会と生活の質プロジェクト・研究資料
シリーズNo.6)、早稲田大学人間総合研究センター、1990年

吉村作治編集、『NHK 大英博物館 2 エジプト・大ファラオの帝国』、NHK 取材班 日本放送出版協会、1990 年

吉村作治、『ファラオと死者の書・古代エジプト人の死生観』、小学館、1994 年

吉村作治、『吉村作治の古代エジプト講義録上・下』、株式会社講談社、1994 年

吉村作治、『エジプトを知る事典』、東京堂出版、2005 年

吉村作治、『古代エジプトの秘教魔術』、大陸書房

吉村作治監修、『展覧会図録 ウィーン美術史美術館所蔵 古代エジプト展』、TBS

アルバート・S・ライオンズ、『図説 世界占術大全』、原書房 2002 年

リュシ・ラミ、田中義廣(他訳)、『イメージの博物誌22 エジプトの神秘……………甦る古代の叡智』、平凡社、1992 年

『死者之書 上・下』 世界聖典全集刊行社 大正 9 年

〈欧文〉

Frazer,J,G., The Golden Bough,Part III,Tokyo,1913.

Davies,N,G. , The King as Sporstman BMMA30,Sect,1960.

H.Frankfort,Kingship and the gods,A study of A ncient Near Eastern Religion as Integration os Society and Nature, The University Cicago Press,Cicago 1948.

Teshima ,HIDEKI,. Chariot in the Asvamedh, Journal of Indian and Buddhist Studies, Vol 57, No3,2009.

参考映像

『古代世界の七不思議 1』 2004 年アメリカ 提供：株式会社東北新社/株式会社ヒストリーチャンネル・ジャパン

『古代世界の七不思議 2』 2004 年アメリカ 提供：株式会社東北新社/株式会社ヒストリーチャンネル・ジャパン

『NHK スペシャル四大文明エジプト そしてピラミッドがつけられた』2007 年 7 月 9 日(21:00～) NHK 総合にて放送 NHK スペシャル「四大文明プロジェクト」

監修：吉村作治 共同制作：ジェデオン(仏) テレプール(独)